萬葉集略解

六

和書門 類
二〇四三六 號
五八 函
二 架
三二 冊

内閣文庫
和書 類
二〇四三六 號
三二 冊
二六三 函
一七 架

内閣文庫
番號 和 20436
冊數 32 （10）
函號 263 43

国立公文書館
National Archives of Japan

萬葉集巻第六

雜歌

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌
一首并短歌　或本三首　車持朝臣千年作歌一首并短
歌　或本二首
神龜元年甲子冬十月幸于紀伊國時山部宿禰赤人作歌
一首并短歌
二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首
并短歌　山部宿禰赤人作歌二首并短歌○冬十月幸于
難波宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌
車持朝臣千年作歌一首并短歌　山部宿禰赤人作歌一首并短歌
三年丙寅秋九月十五日幸于幡磨國印南野時笠朝臣金

三村作歌一首并短歌（播を幡とかけるハ本文も同しなれハ同音なれハかくもかけるなるべし）山部宿禰
赤人作歌一首并短歌　過辛荷島時山部宿禰赤人作
歌一首并短歌（辛と幸ト誤）　過敏馬浦時山部宿禰赤人作
歌一首并短歌
四年丁卯春正月勅諸王諸臣子等散禁於授刀寮時作
歌一首并短歌（刀とカト誤）
五年戊辰幸于難波宮時車持朝臣千年作歌四首（千と于ト誤）
同幸之時膳王作歌一首○太宰少貳石川朝臣足人歌
一首　帥大伴卿和歌一首（帥と師ト誤）○冬十一月太宰官
人等奉拜香椎廟時帥大伴卿作歌一首　大貳小野朝
臣老作歌一首　豐前守宇努首男人作歌一首○帥大
伴卿遥思芳野離宮作歌一首○同卿宿次田温泉時聞

鶴喧作歌一首
天平二年庚午勅遣擢駿馬使大伴道足宿禰等時勅使
大伴道足宿禰饗帥家日葛井連廣成應聲吟歌一首○
冬十一月大伴坂上郎女名兒山作歌一首○同坂上郎
女向京海路見濱貝作歌一首○冬十二月太宰帥大伴
卿上京之時娘子作歌二首　大納言大伴卿即和歌二
首
三年辛未　大納言大伴卿在寧樂家思故郷作歌二首
四年壬申　藤原宇合卿遣西海道節度使時高橋連蟲麻
呂作歌一首并短歌（麻呂と磨ト誤）○天皇賜酒節度使卿等御
歌一首并短歌○中納言安倍廣庭卿歌一首（卿と御ト誤）
五年癸酉　超草香山時神社忌寸老麻呂作歌二首（社と杜ト誤）

○山上臣憶良沈痾之時歌一首○大伴坂上
郎女與姪大伴宿禰家持歌一首○安部朝臣蟲麻呂月
歌一首○大伴坂上郎女月歌三首○豊前國娘子月歌
一首○湯原王月歌二首
○藤原朝臣八束月歌一首○市原王
宴禱父安貴王歌一首○湯原王打酒歌一首○紀朝臣
鹿人松樹歌一首 ○同鹿人泊瀬河
歌一首○大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首○同郎
女初月歌一首○大伴宿禰家持初月歌一首○大伴坂
上郎女宴親族歌一首

六年甲戌 海犬養宿禰岡麻呂應詔歌一首○春三月幸
于難波宮時歌六首 作者未詳歌一首 船王歌一首

守部王歌一首 山部宿禰赤人歌一首 安部朝臣
豊繼歌一首○筑後守葛井連大成遥見海人釣船作歌
一首○桉作村主益人歌一首

八年丙子 夏六月幸于芳野離宮時山部宿祢赤人應詔
歌一首幷短歌○市原王悲獨子歌一首○忌部首黒麻
呂恨友人賒来歌一首 ○冬十一月葛城王等賜橘
姓之時御製歌一首○橘宿祢奈良麻呂應詔歌一首○
十二月葛井連廣成家宴歌二首

九年丁丑 春正月橘少卿幷諸大夫等宴彈正尹門部王
宅歌二首 門部王 橘文明 ○榎井王後追
和歌一首○春二月諸大夫等宴左少辨巨勢朝臣宿奈
麻呂家歌一首○夏四月大伴坂上郎女越相坂山時作

歌一首
十年戊寅　元興寺之僧自嘆歌一首○石上乙麻呂卿配
土左國時歌三首并短歌（々麻呂を磨に誤）○秋八月右大臣橘家
宴歌四首（本文八月二十日とあるハ誤なりの）
十一年己卯（々一を上に誤）天皇遊獦高圓野之時獲遁走堵中小
獸擬獻御在所大伴坂上郎女作歌一首
十二年庚辰冬十月依太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發
軍幸于伊勢國之時河口行宮内舎人大伴宿祢家持作
歌一首　天皇御製歌一首　丹比真人屋主歌一首
狹殘行宮大伴宿祢家持作歌二首　美濃國多藝行宮
大伴宿祢東人作歌一首（々藝を勢に誤）大伴宿祢家持作歌一
首　不破行宮大伴宿祢家持作歌一首

十五年癸未　秋八月内舎人大伴宿祢家持讃久邇京師
作歌一首（本文八月十六日とあるハ誤なり）○高丘連河内歌二首○安積親王
宴左少辨藤原朝臣八束家之日内舎人大伴宿禰家持
作歌一首
十六年甲申　春正月諸卿大夫宴安倍朝臣蟲麻呂家歌
一首（本文正月五日とあり）○同月十一日登活道岡集一株松下飲歌
二首（大伴宿祢家持　市原王）○傷惜寧樂京師荒墟作歌三首　作
主未詳○悲寧樂京故郷作歌一首并短歌○讃久邇新
京歌二首并短歌○春日悲傷三香原荒墟作歌一首并
短歌○難波宮作歌一首并短歌○過敏馬浦時作歌一
首并短歌

此巻ハ養老七年より神亀次ニ天平十六年までの年号を挙つゝ、且帥大伴卿とのみ名を志るさぬハ家持ての家ニ集つるを知べし

雑歌

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時。笠朝臣金村作歌一首并短歌　続紀ニ元正天皇此幸のことみえず、金村伝志れず

瀧上之。御舟乃山爾。水枝指。四時爾生有。刀我乃樹能。彌繼嗣爾。萬代。如是二二知三。三芳野之。蜻蛉乃宮者。神柄香。貴将有。國柄鹿。見欲将有。山川乎。清清。諸之神代従。定家良思母

たきのうへのみふねのやまにみづえさしおひてあるとがのきのいやつぎつぎによろづよにかくし志らさんみよしぬのあきつのみやハかんからかたふとからんくにからかみがほしからんやま

かはをきよみ。さやけみ。うべしかみよゆ。さだめけらしも

吉野の瀧の上なる三船の山に、みづ枝ハうるはしきえだにて、若枝などいふ、
志げハ繁きなり、つが栂の木の枝なり、集中皆都賀(ソガ)の木のつがにて、つがと訓
ときへバ、どこなしてつぎつぎとつゞくべき為れど、枝のしげるハ、みなつがの木のごとくあれバ
かくハ万ハ都の字也かくいへるにハ、万となるべきにやあらん、かくしの
しハ助辞なり、万代もかくのごとし志ろしめさんとなり、神がらの国がらのからハ
故の意、神とハ此山を安置せる神をいふ、清は二字のうち一字ハ謬りなるべし
或ハ誠にいたく峻清なるやまなるなん、志のうらハたゞみさやけみと訓べし、山がら
の下一句足らざるハ古言の例あれど、是ハ奈良の朝のうたなれバ、志かのこと
らじ、句の落たるなるべし、此離宮いつの清付造られしの志られねど、神代
よりいひつぐといふ也と此代なるべし

反歌、

毎年如是裳見牡鹿。三吉野乃。清河内之。多藝津白波
としのはにかくもみてしかみよしぬのきよきかふちのたぎつしらなみ
としのはハ毎年なり、常にかくもみてしがなと願ふべし、牡鹿の字をしかとよめれど、
かく訓よしかるべし、牡鹿を借る例多し、かふちハ河の曲れる所をいふ
山高三。白木綿花。落多藝。追瀧之河内者。雖見不飽香聞
やまたかみしらゆふはなにおちたぎつたぎのかふちハみれどあかぬかも
ゆふばなハ白き花のごとくいへり、ゆふハ木綿なり、此ほかにいふ

或本反歌曰
神柄加(カミカラカ)。見欲(ミカホシ)賀藍(カラム)。三吉野乃。瀧河内者。雖見不飽鴨
みがほしからんハ見まほしからんなり、此歌ハ此所のうたなるべし
三吉野之。秋津(アキツ)乃川(カハノ)之。萬世(ヨロヅヨ)爾(ニ)。斷事(タエルコト)無(ナク)。又還将見(マタカヘリミン)
川のながれのたえずしてかへりみんとなり

千ヲ千ニ誤

辨ハ利ノ誤辨ノ下今詳ノ字有衍迠紐ヲ級ニ誤惜ヲ情ニ誤

泊瀬女造木綿花三吉野瀧乃水沫開来受屋

たぎつ落る水の泡の木綿花のさまをゆふとのふ、大瀧といひて、大石のうへ

と斜に落る所を宮ある所を縁てめでしゆるとぞ、そこ人のいへる

車持朝臣千年作歌一首并短歌　千年傳されど、今千を千に改

元暦本によりて改

味凍。綾丹乏敷。鳴神乃音耳聞師。三芳野之。

うまごりのあやにともしくなるかみのおとのみききしみよしぬの

真木立山湯見降者川之瀬毎。開来者朝霧立。

まきたつやまゆみくだせばかはのせごとにあけくればあさぎりたち

夕去者川津鳴奈辨。紐不解。客爾之有者吾耳為而。

ゆふされはかはづなくなべひもとかぬたびにしあればあのみして

清川原乎見良久之惜裳

きよきかはらをみらくしをしも

うまごりの枕詞、あやにハ嗚呼之、ともしくハ賞しきこと、なる神の枕詞、

ゆきまれぞハ枝のゆれがら之、辨古葉略要に利に作るをよしとて、元暦本ニハ

辨に作れるをなへまてハてしハかなるがで、又本辨の下詳の字あり、一本なきこと

よしとて、ひもとかぬハ、吉野従駕のたびなれバ、紐解なでまろ寝するなく、

あのみしてハ吾而為してなく、みらくハ見るを延ぐ、しハ助辞、惜しハ本情

ことハ誤之、元暦本によりて改つ、しハ助辞

反歌一首

瀧上乃三船之山者雖畏思忘時毛日毛無

たぎのへのみふねのやまはかしこけどおもひわするるときもひもなし

宮ちかき雖畏てハ恐えつしし、畏ハ見の誤なく、みつれどもなるべし、下句ハ

都て人を忘れぬ之、ちかの末の何、又流るる反歌なく知べしといつと

之千川字ヲ脱

或本反歌曰

千鳥鳴三吉野川之音成止時梨二所思公

古本要ニ成を茂ニ作え唐本ニまた志げとも訓られど非也、之の下に一本

川の字あり、かたくなれども川べし、川音のかくの如くこの川ハよしわたし、

さらさらとよりみてハのはとよめる八巻七十三巻にて三吉野河の...

あかね

茜刺日不並二吾戀吉野之河乃霧丹立乍

あかねさす ひならべなくに わがこひは よしののかはの きりにたちつつ

きの香なり

右年月不審但以歌類載於此次焉或本云養老七年五月幸于芳野離宮之時作

神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時山部宿禰赤人

作歌一首并短歌 続紀神亀元年十月天皇幸紀伊国癸巳行至紀伊国那賀郡玉垣頓宮甲午至海部郡玉津島頓宮留十有餘日戊戌造離宮於岡東云々又詔曰登山望海此間最好不労遠行足以遊覧故改弱濱名為明光浦云々とみゆ

安見知之和期大王之 常宮等 仕奉流 左日鹿野由 背上爾所見奥島 清波瀲爾 風吹者 白浪左和伎潮干者 玉藻苅管 神代従 然曽尊吉 玉津島夜麻

やすみしし わごおほきみの とこみやと つかへまつれる さひかのゆ そがひにみゆる おきつしま きよきなぎさに かぜふけば しらなみさわぎ しほひれば たまもかりつつ かみよより しかぞたふとき たまつしまやま

葦今
壽ニ誤

わかハわかの浦也、さひかハ紀伊海部郡に雜賀（サヒカ）の庄あり、若浦の事之上にいへり、
常宮とよめるハ離宮也、宮ある常宮ハとこみやとよむへし、常ハ借字にて
てかはらぬことをいへり、あそこハかしこのことぞ之

反歌

奧島荒礒之玉藻潮干滿伊隱去者所念武香聞

おきつしまありそのたまもしほひみちいかくろひなばおもほえんかも

礒によする藻のすゞしくうつくしきが潮みちてかくれなばこひしからんとなり、
いハ發語、潮干滿ハしほ干なるがほどに滿んをいふと宣長のいへり

若浦爾塩滿来者潟乎無美葦邊乎指天多頭鳴渡

わかのうらにしほみちくればかたをなみあしべをさしてたづなきわたる

かくことなるハ潮の滿来て干潟のなきにあるなり、葦をかくを壽とあるハ
あやまりなるべし

丹ヲ今
舟ニ誤

右年月不記但偁從駕玉津島也因今檢注行幸年月以
載之焉　偁とハ偁に從ひて偁ハ古稱字也

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌
一首并短歌　續紀此年月此行幸を載せず

足引之御山毛清落多藝都芳野河之河瀬乃
あしびきのみやまもさやにおちたぎつよしぬのかはの、かはのせの、
淨乎見者上邊者千鳥數鳴下邊者河津都麻
きよきをみれば、かみべにハちどりしばなき、しもべにハかはづつま
喚百礒城乃大宮人毛越乞爾思自仁思有者
よぶ、ももしきのおほみやびとも、をちこちにしゞにしあれば、
毎見文丹乏玉葛絶事無萬代爾
みるごとにあやにともしみ、たまかづらたゆることなくよろづよに

如是霜顧跡。天地之。神乎曾禱。恐有等毛
かくしもがもと。あめつちのかみをぞいのる。かしこかれども
御山には宮所あればこそ、よべよべは上つ瀬下つ瀬の大宮人もともどもこらまの
翁かくし翁はも見をかこみしはつゝ、こゝろかで、ふてよみまん、てかくて
よは従ふなるの介左京の友人はこぶかる趣有りがたきをいかゞあるべしと
きられどいさゝかもおもふべからし。思自仁思有者は鬱てあれはいかゞあるらんよ
からくさ古ぶ自の万葉なりし、さらばそひよまれどもよみまんつされど柿稔る
らむで、字の法あるべく柿本て、文の下丹をとも舟を揺れて、元磨あらくの
よみとく汲つゝ、おやまは読いて、ともしくはめでしきこゝろくこゝはめでたき
ここの此離その万世がくのめてあれうし神を拝ずつく

反歌二首

萬代見友将飽八。三吉野乃。多藝都河内之。大宮所

よろづよにみともあかめやみよしぬのたぎつかふちのおほみやところ
つるとしあらんやと
人皆乃。壽毛吾母。三吉野乃。多吉能床磐乃。常有沼鴨
ひとみなのいのちもわれもみよしぬのたきのとこはのつねならぬかも
元磨が男人とよ人のよきよもしいづのみかしとこそは万葉之つね
なるみるもは読ろのめしくあるまあれかしと祈つゝ

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

八隅知之。和期大王乃。高知為。芳野離宮者。立名附
やすみしゝわごおほきみのたかしらすよしぬのみやはたゝなづく
青墻隠。河次乃。清河内曾。春部者。花咲
あをかきごもりかはなみのきよきかふちぞはるべははなさきを
乎遠里。秋去者。霧立渡。其山之。彌益〻爾。

あきされバきりたちわたるそのやまのいやますますに
此河之絶事無　百石木能　大宮人者　常将通
このかはのたゆることなくもゝしきのおほみやびとはつねにかよはん
離の下宮の字を移せバ、たゝなづく枕詞、ちがきごもりハ青山四方を
そばへるちめぐれる也、河なみハ山をめぐりて、とりまくハ半二つにわかるゝをいふ
たとへ、其山のごとく、此河のごとく、さ山のやうに、此河のやうにといふて思へり
反歌二首
三吉野乃象山際乃木末爾波幾許毛散和口鳥之聲可聞
みよしののきさやまのまのこぬれにはこゝだもさわぐとりのこゑかも
象山ハよしのの内にて、これハあまたの名所也、集中にも見ゆとかや
さはげるなり
烏玉之夜乃深去者久木生留清河原爾知鳥數鳴

ぬばたまのよのふけゆけバひさぎおふるきよきかはらにちどりしばなく
ひさぎハ楸也、俗に木さゝげといふもの
安見知之和期大王波見芳野乃飽津之小野笑野上者
やすみしゝわごおほきみはみよしののあきづのをのゝのゝへにハ
跡見居置而　御山者　射目立渡　朝獵爾　十六
とみすゑおきてみやまにハいめたてわたしあさかりにしゝふみ
履起之　夕狩爾　十里蹋立　馬並而　御獦曽立為
おこしゆふかりにとりふみたてうまなめてみかりぞたゝす
春之茂野爾
はるのしげぬに
とみハ鳥獣の跡をとめて見る人をいふ、いめハ射部とかく、射る
人をいふ、つかふるをたてゝ従ひていふ也、こゝハ射目とかくハ

挟ヲ今挟ニ誤

便ヲ今使ニ誤

誤也、古葉略類聚及元暦本ニ時因とあるによれり、さるにあてハ要ハ分らるべし也

反歌一首

足引之山毛野毛御獦人得物矢手挟散動而有所見

あしびきのやまにものにもみかりびとさつやたばさみさわぎてあるみゆ

さつやハ幸箭也、既ニ出

右不審先後但以便故載於此次　吉野の幸ハ或日ハ御幸也

前の幸ニかくるべし

冬十月幸于難波宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌

後紀ニ此幸のことみえず

忍照。難波乃國者。葦垣乃。古郷跡。人皆之。念

おしてるなにはのくにはあしがきのふりぬるさとゝひとみなのおもひ

為ハ無ノ誤

收元ニ治ニ作

息而。都禮毋為有之間爾。續麻成。長柄之宮爾。

いこひてつれもなくありしあひだにうみをなすながらのみやに

真木柱。太高敷而。食國乎。收賜者。奧

まきばしらふとたかしきてをすくにををさめたまへばおきつ

鳥。味經乃原爾。物部乃八十伴雄者。廬為而。

どりあぢふのはらにもののふのやそとものをはいほりして

都成有。旅者安禮十方

みやこなしたりたびにはあれども

あしがきハ枕詞、おもひいこひてハ思ひやむ也、息の字ハ誤ならん

無板例ニあらんの考へし、つれもなくハ、為ハ無の誤也、書ニつれなき

さらのみへは注見えたまて考ひきあしてうしつゝえはあさと云う詞にし、

うみをなすて枕詞、ながらの宮ハ、孝徳紀ニ難波長柄豊碕ニ

都遷しみやこうつりて久しき、なにはなる長柄の原。和名抄東生郡味
原ハ背、原をあふとよむハ菅原、萱原の類也。桓武紀攝津国鰺
生野とみゆ。八十伴のをハもろもろ従駕の百人供奉をいふ。都を
うつさるゝハ、幸しみやこをうつされしをいふて都のぬしとなりて

反歌二首

荒野等丹里者雖有大王之敷座時者京師跡成宿

あらのらにさとはあれども、おほきみのしきますときはみやことなりぬ

以里ハ荒野の中にあるといへども

海未通女棚無小舟榜出良之客乃屋取尓梶音所聞

あまをとめたなゝしをぶねこぎいづらし、たびのやどりにかぢのおときこゆ

棚なし小舟こぎいづらし、たびのやどりハ我身の仮屋をいふ

車持朝臣千年作歌一首并短歌

五百ヲ誤テ百五トセリ

住ヲ往ニ誤

鯨魚取　濱邊乎清三　打靡　生玉藻尓朝名寸

いさなとりはまべをきよみ、うちなびきおふるたまもにあさなぎに

二千重浪縁夕菜寸二五百重波因　邊津浪之益敷

ちへなみよせゆふなぎにいほへなみよる、へつなみのいやしく／＼に

布尓月二異二日日雖見　今耳二　秋足目八方

つきにけにひゞにみれども、いまのみにあきだらめやも

四良名美乃五十開回有　住吉能濱

しらなみのいさきめぐれる、すみのえのはま

いさなとりハ枕詞、五百とハ百五を飛ぶる八後之、邊津浪ハ濱邊の浪之。益
しく／＼ハ繁ク重ル也。けにハ殊也。能ハ欲の借字也。見てふみがほしきといへ
るハいまハかへつて、いさきめぐれるハ、磯千回の浪の
うちよせてくだくるなどいふ。神代紀秀起浪穂之上云々　一書ニ秀起此

云左岐陀豆麼とす、按ニこの豆ハ旦の誤なるべし、さきたてるとよむべきなり、されバいハ発語にてさき
めぐるとハ浪の高く起ちめぐるといへり、住を本に往とす、之麼なを作く
改、住吉とちへ住のえとのみいへり、日吉日枝とかけるひえとよむがごとし、和名
抄にもすみよしと有るハ古訓より住よしともいひたるなり

反歌一首

白浪之千重来縁流住吉能岸乃黄土粉二寶比天由香名
しらなみのちへにきよするすみのえのきしのはにふににほひてゆかな
巻一草枕旅ゆく君と知らませバ岸のはにふににほはさましをとよ
めるも同じことなり、ゆかなハゆかんの約ハ音を借てかなの字を用

山部宿禰赤人作歌一首并短歌

天地之遠我如　日月之長我如　臨照難波
あめつちのとほきがごとく　ひつきのながきがごとく　おしてるなにハ

乃宮爾和期大王國所知良之　御食都国日之御調等
のみやにわごおほきみくにしらすらし　みけつくにひのみつきと
淡路乃野島之海子乃海底　奥津伊久利二　鰒珠
あはぢののしまのあまのわたのそこ　おきついくりに　あはびたま
左盤爾潜出　船並而　仕奉之　貴見禮者
さはにかづきで　ふねなめて　つかへまつるがたふときみれば
御志らしめして白之、さらに貴きされバいつもかくしてみえし、み
けつ国ハ御食の物をまゐる国をいふ、日のみつきハ日次の貢也、このみ様まで
いくりハ海底の石也、あはびたまハ鰒の貝をいふ、さはハ多く也、たふ
ときハめでたききよし、海人までのかく貴をいそしく仕へまつるをみれバ
天地と共に久しく治め給ふべきよしをいへり

反歌一首

朝名寸二梶音所聞三食津國野島乃海子乃船二四有良信

あさなぎにかぢのときこゆみけつくにぬじまのあまのふねにあるらし

三年丙寅秋九月十五日幸於幡磨國印南野時笠朝臣金村作歌一首并短歌　續紀ニ此月戊寅幸ス

名寸隅乃船瀬従所見淡路島松帆乃浦爾朝名藝爾玉藻苅管暮菜寸二藻塩焼乍海未通女有跡者雖聞見爾将去餘四能無者大夫之情者梨荷手弱女乃念多和美手徘徊吾者衣戀流船梶雄名三

なきすみのふなせゆみゆるあはぢしまゝつほのうらにあさなぎにたまもかりつゝゆふなぎにもしほやきつゝあまをとめありとはきけどみにゆかんよしのなければますらをのこゝろはなしにたをやめのおもひたわみてたもとほりわれはぞこふるふねかぢをなみ

なきずみ船瀬播磨なるべし。なぎとめのゆくといふを思ふに、おもひたわみてハ志なへくぶれといふなるべし。従駕るまゝ播磨にありて淡路の海人おとめの業をみるよしのなきを歎きて、云るは舟かぢこそあらねば、舟梶なくして恍ばかりきよしよかたちてよみたる

反歌二首

玉藻苅海未通女等見爾将去船梶毛欲得浪高友

たまもかるあまをとめどもみにゆかんふねかぢもがもなみたかくとも

往回雖見将飽八名寸隅乃船瀬之濱爾四寸流思良名美

ゆきめぐりみともあかめやなきすみのふなせのはまにしきるしらなみ

巻十七をとらへるべしゆきめぐるへと由伎米具利とあり、みともハみるとも也、志きるハ寄るなり

山部宿禰赤人作歌一首并短歌　たゞ同じ幸の時也

八隅知之吾大王乃神随高所知流稲見野能

やすみしゝわがおほきみのかんながらたかしらしぬるいなみぬの

大海乃原笑　荒妙　藤井乃浦尓鮪釣等海人船

おほうみのはらの、あらたへのふぢゐのうらにしびつると、あまのふね

散動　塩焼等人曽左波尓有浦乎吉美宇倍毛釣者為

さわぎ、しほやくとひとぞさはなるうらをよみ、うべもつりはす

濱乎吉美諾毛塩焼蟻往来　御覧母知師　清白濱

はまをよみ、うべもしほやく、ありがよひみまくもしるし、きよきしらはま

いなみぬ既に出、あらたへの枕詞、藤井の浦　和名抄播磨明石郡葛江布知衣、まへにあらたへの藤江の浦にすゞきつるとよめるにても井ハ江の誤なるべし、和名抄鮪之比とみゆ、ありがよひみまくもしるしと云ハ、

さきくよりも幸しのびてみまくもしるしうべなるかなといへる也、白濱ハ

白まさごのきよきをいふ、しらはまにて地名にあらず、

反歌三首

奥浪邊波安美射去為登藤江乃浦尓船曽動流

おきつなみへなみしづけみいさりすとふぢえのうらにふねぞさわげる

不欲見野乃浅茅押靡左宿夜之氣長在者家之小篠生

いなみぬのあさぢおしなべさぬるよのけながくしあればいへししぬばゆ

小篠ハ小ハ添たるにや、さぬるのさハ發語、篠生ハしのぶる同じく借字

けながく

明方潮干乃道乎従明日者下咲異六家近附者

あかしがたしほひのみちをあすよりハしたゑましけんいへちかづけば

下咲ハしたにゑむ心のうちよりよろこびてゑまるゝをいふ

敷ヲ今數ニ誤

隈ヲ隅ニ誤

過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首并短歌　和名抄播

磨餝磨郡辛室加良牟呂といふあるうや、仙覺の抄播磨風土記

を引て、韓荷島韓之破船所漂之物就此島故云韓荷島といへり

味澤相。妹目不數見而。　敷細乃。　枕毛不巻。　櫻皮。

あぢさはふいものめしばみずてしきたへのまくらもまかずかには

纒作流舟二。　真梶貫。　吾榜来者。　淡路乃。　野島毛

まきつくれるふねにまかぢぬきわがこぎくればあはぢのぬじまも

過。　伊奈美嬬。　辛荷乃島之島　際從。　吾宅乎見者。　青

すぎいなみつまからにのしまのしまゆわぎへをみればあを

山乃曾許十方不見。　白雲毛。　千重爾成来沼。　許伎多武流。

やまのそこともみえずしらくももちへになりきぬこぎたむる

浦乃。　盡。　往隠。　島乃埼埼。　隈毛　不置。　憶曾

うらのことごとゆきかくるしまのさきざきくまもおかずおもひぞ

吾来。　客乃氣長彌

わがくるたびのけながみ

味さはふハ枕詞、妹がめしばぞもえずしてハしばしも見ずして、又櫻に數の字ハ

衍文の、いものめをもえずてとしてもよし、又宮本ハ不數見而とかけれ

てどもよろしからず。志きたへの枕詞、數をも數に從ふ例によりて改つ

かにはまきハ、舟の舳を蕨縄してまきめぐ櫻の皮もてまきたるな

らん、いなみつまハ既に出、からにのしまのしまわにてハ淡路嶋を遠くるを

れバ、あをのやまもみえぬといふ、こぎたむるハ漕廻る也、浦のことごとハ

其二義ある国のことごとく、ことごとく、ゆき隠るハ去舟

の嶋に隠るをいふ、隈ハ本隅と有、元暦本に依て改ける也、こハ

日久しくして也

往ハ居ノ誤

反歌三首

玉藻苅辛荷乃島爾島回爲流水鳥二四毛有哉家不念有

六

たまもかるからにの島にあさりする鳥にしもあれや家おもはざらん

鳥にしもあれやハあれかしと願ふ心なるをおもはまじき

みやこなるし

島隠吾榜来者乏毳倭邊上真熊野之船

しまがくりわがこぎくれバともしかもやまとへのぼるまくまぬのふね

紀へこぎけるれバやまとのぼる人の舟のしるしやましきにうらやましきぞ

ともしきるハ羨一說にハ本人乏しといへる意といへり

風吹者浪可将立跡伺候爾都多乃細江爾浦隠往

かぜふけバなみのたゝむとさもらふにつたのほそえにうらがくれをる

さもらふハ浪を忌れうかゞふさまにまして往隠るゝ所のまことごとくなる

さてこの浦隠をるも居るべし往を居に作るべし紀にも

細江播磨の

過敏馬浦時山部宿祢赤人作歌一首并短歌

御食向淡路乃島二直向三犬女乃浦能奥部庭

みけむかふあはぢの島にたゞむかふみぬめのうらのおきべにハ

深海松採浦回庭名告藻苅深見流乃見巻欲跡

ふかみるとらしうらまにハなのりそかるふかみるのみまくほしけど

莫告藻之己名惜三間使裳不遣而吾者生友奈重二

なのりそのおのがなをしみまづかひもやらずてわれハいけるともなし

みけむかふ枕詞、みぬめハ敏馬、深みるハ深みるといふ料、名のりそハ

おのが名をいはん料の、ほしけどハ欲けれどの略、間使ハ字のごとく

をかく清らなるをいふべし、重二ハ四のうらく

反歌一首

為間乃海人之塩焼衣乃奈禮名者香一日毋君乎忘而将念

すまのあまのしほやきゞぬのなれなばかひとひもきみをわすれておもはん

塩やき衣ハなれくるしといはん序也、そくなれ訓らバおもひわすれんねさ

あふこといふべし、わすれんハ信ずる詞の例也

右作歌年月未詳也但以類故載於此次

四年丁卯

春正月勅諸王諸臣子等散禁於授刀寮時作歌一首并短歌

續紀廢帝天平宝字三年十二月置授刀衛ニ、同紀高野天皇天平神護元年二月改授刀衛為近衛府云々、獄令義解云、凡禁囚

徃ヲ住二誤

死罪枷杻、婦女及流罪以下去杻、其罪散禁云々、散禁ハ今禁足といふなるべし

真葛延春日之山者打靡春去往跡山上丹

まくずはふかすがのやまハうちなびくはるさりゆくとやまのへに

霞田名引高圓爾鶯鳴沼物部乃八十友能壮

かすみたなびきたかまとにうぐひすなきぬものゝふのやそとものを

者折木四哭之来繼皆石此續常丹有脊者友名目而

かりがねのきつぐみなし、かくつぎてつねにありせバともなめて

遊物尾馬名目而徃益里乎待難丹吾

あそばんものをうまなめてゆかましさとをまちがてにわが

為春乎決巻毛綾爾恐言巻毛湯湯敷有跡

せしはるをかけまくもあやにかしこしいはまくもゆゝしからんと

宮ヲ官ニ誤ル

豫。兼而　知者。千鳥鳴。其佐保川丹。石二生。
あらかじめかねてしりせば　ちどりなく　そのさほがはに　いそにおふる
菅根取而。之努布草。解除而益乎。往水丹。潔而
すがのねとりて　しのぶぐさ　はらへてましを　ゆくみづに　みそぎてまし
益乎。天皇之。御命恐。百礒城之。大宮人之。玉
をおほきみの　みことかしこみ　ももしきの　おほみやびとの　たま
桙之。道毛不出。戀比日
ぼこのみちもいでず　こふるこのごろ

まくらことばハ、菅ハ、しるよたつのゆゑはいつるのく、ちるびく、梓弓、往〻住る
作るハ誤也、此まゝよまバ、ゆくと、あるよまとゆかバ、ゆく〳〵と云、折木四哭之ハ、
巻十さきもりのつよよみ時よ月をとよみ切木四之泣きてゆくはましくしも、
此切木四之泣五字かりがねとよめるをもて、こでもかりがねの例、

此歌ハまんえふしふの例あれど、そもしらかく来継皆石の字よ
よみがたければ、諸びとの説とりどりくさていへり、或人云、折ハ断の誤く、益
莊子造鋸截断木器とみへ、四ハ器の誤なるべし、鋸のことかかくときて
ゆれバかりのこぎりの用なるゆゑんといへり、来継皆石、前ハ皆ハ春の誤
まく、之来継春石五字を、しきつぎはるしとよむべし、さればうつのた
しきつぎていへんは梓弓とをん、ことハその及次て立据うるにいへるなん
といはれき、契沖ハかりがねのしきつぎみるしと訓て、四の字ハ行ぬべく
されど、折木切木ハ同じく、莉とのことま、庵な用ゆるべし、さて庵ハ友と
しるしこゝろあるれバ、こゝろみおほくらしきこゝろつぎぞいふことありてま
あらせびしつゞりて人をかしのしハ助辞く、正月のあるれバ庵の御なる
まかりたる時のうハ、うみちびやと離むる人おもひ、是ハ此庵ぞら
のならひあへると庵よよせていへん、時にかりゆべうしてといひて、え梓る、

よく人の方ハ、唐の杜まくを使るあらきるゆてよみ出してハ心えんで、巻十秋
の唐をよめる歌にきゆる、杜風に山下へ独る唐がりハ絡遠ざかる〻とも思ひつて、
音ひあにゆ唐が山中のふるとを夜鳴する因へをもやうだよめるが中に、唐が
ねきにゆみしまらしもうだもよめるとみれバ、ちゝ人ハ杜枕といへるで、辞と
しもゆけバ、幼さなきも有るさるをもひろくよみしくされバてハ、皆ハ
比日二字をと一字に誤、石ハ如の誤なるべく、来継比日ハきつぎこのごろと訓
如此倭ハかくつぎてと訓べし、宣長考に縦令せりとさて、ここハ宣長の
いへるごとく、唐がらの八本つぎといへん序なるべく、きつぎハ其のまゝつぎて、此
此のごとくかくつぎてあるまゝ有らせバといへ、さて八十とものとりとハ
友なめてへうのれへ、決ハ鉄の字と通じたるなるべし、ゆしこうへんとある
うぢ名をこハかく見ずしかくんとかねて知る〻あらバこそ、黄の根とりて
ここハ稜ハ菅なる掃清ゆれバこそ、みそきハ水なくて身をそぐなるを、

無ノ下侍ヲ待ニ誤 刀ヲカニ誤

古みづ葉ハこて六葉にあらで稀ゑ、其る神の其の杜びのみじびがくして
出づるを、かく数禁になりんと詠て知せバ後為そぎりしてさる花よあ
ききらん物をとえ

反歌一首

梅柳過良久惜佐保乃内爾遊事乎宮動〻爾

うめやなぎ、すぐらくをしみ、さほのうちに、あそびしことを、みやもとゞろに

佐保のうちハ大和の佐保の地の内といふて、其の時さんとこしみくせ
遊びしを、宮中にさゝとゞろかせし之唐か動の下にもらるをとよまる

右神龜四年正月數王子及諸臣子等集於春日野而作打毬之樂其日忽天陰雨雷電此時宮中無侍從及侍衛勅行刑罰皆散禁於授刀寮而妄不得出道路于時悒憤即作斯歌作者未詳　和名抄云毬 万利 字知 とあり

五年戊辰

幸于難波宮作歌四首　神亀五年行幸伝はらざれど、哥の主はおぼつかなし、

此諸作誤れるの目録ニ宮下時の字あり

大王之界賜跡山守居守云山爾不入者不止

おほきみのさかひたまふとやまもりすゑもるといふやまにいらずばやまじ

さかひ給ふとハ領して界とすること云、是ハ親のまもる女をたとへて云る歟、云の之

見渡者近物可良石隱加我欲布珠乎不取不已

みわたせばちかきものからいそがくれかゞよふたまをとらずばやまじ

かゞよふハかゞやく也、あそびのえる隠れぬめぐりてみえぬ目に

そこかゞやけハなくて身つのある妹に譬ふる也

韓衣服楢乃里之島待爾玉乎師付牟好人欲得

からころもきならのさとのしままつにたまをしつけんよきひともがも

巻十二亡失萬衣著楢の山にありしたゞちの里まで見えきたるし、
といひの心は、服は着る也、是をゆきけきならのさとなる、ならの松ある
嶋のこぶらもかんさびにかりてよめる。あるべし、待は松也、むとしの、は
妙齢なりつの事る侍くる女のうるはしきをたとへて、よき人にめで添する
ほしく思ひつるや、嶋松の下なる宿の君妹の樹ふてよあれば、
こゝも嶋ハ君の宿のこゝ、好ハ取の字の宿なりんき、さとのきみまつる
こと昔るらんひとしもが訓べしよりて

竿壮鹿之鳴奈流山乎越将去日谷八君當不相将有

さをしかのなくなるやまをこえゆかんひだにやきみはあはざらん

杖おりするこゝろ女と云るゆるべし、これハ皆もえ曹本當の字
なるてハあなじしてあらんと訓て

右笠朝臣金村之歌中出也或云車持朝臣千年作之也

云の下 集の字なし

膳王歌一首

朝波海邊爾安左里為暮去者倭部越雁四之母

あさにはうなびにあさりし ゆふされば やまとへこゆる かりしともしも

うなびは海べへ、あさりは集中求食とかけり、旅のさまなるべし、紀ハえの如

唱ふべし、ともしハうらやましき 集中例多

右作歌之年不審也但以歌類便載此次

太宰少貳石川朝臣足人歌一首

刺竹之大宮人乃家跡住佐保能山乎者思哉毛君

さすたけの おほみやびとの いへとすむ さほのやまをば おもふやもきみ

さすたけの枕詞、大宮人の家は佐保にあれば、かくよめり、君とは旅人をさし

たり、帥之は旅人同佐四縄が旅人べし、ならの京をおもほしやとなりとよ

椎ヲ推ニ誤

みしおもほゆるらう

帥大伴卿和歌一首

八隅知之吾大王乃御食國者日本毛此間毛同登曽念

やすみしし わがおほきみの をすくには やまともここも おなじとぞおもふ

日本とかきしハ大和国也、これハ大宰にて冬十八月によめれば於奈良自く

みなかうらなるを

冬十一月太宰官人等奉拜香椎廟訖退歸之時馬駐于香椎浦各述懐作歌

神功紀皇后然襲を撃ちたまひて、橿日宮より松峡宮に還りたまふ、又皇后橿日浦に還りたまふ、香椎廟は皇后をいはひまつるなるべし、和名抄筑前糟屋郡香椎加須比、筑前国風土記云、到筑紫例先参謁于哥襲宮、哥襲可紫比也とあり

帥大伴卿歌一首

去来兒等香椎乃潟爾白妙之袖左倍所沾而朝菜採手六
いざこどもかしひのかたにしろたへのそでさへぬれてあさなつみてん
あごもハ従者をさして、かたハ干潟之、朝菜ハ朝食の料に海菜をつむ也、ひの
たまく袖ぬるゝをいとはずして朝菜をつむといへり

大貳小野老朝臣歌一首　後紀天平九年六月甲寅太宰大貳従
四位下小野朝臣老卒ともえゆ
時風應吹成奴香椎潟潮干汭爾玉藻苅而名
ときつかぜふくべくなりぬかしひがたしほひのうらにたまもかりてな
ときつ風ハ汐のみちくる時の風をいふ、汭ハ水の曲をいふ、苅てなハ刈てんと

豊前守宇努首男人歌一首
往還常爾我見之香椎潟従明日後爾波見縁母奈思
ゆきかへりつねにわがみしかしひがたあすゆのちにはみんよしもなし

帥大伴卿遥思芳野離宮作歌一首
隼人乃湍門乃磐母年魚走芳野之瀧爾尚不及家里
はやびとのせとのいはほもあゆはしるよしののたきになほしかずけり
はやびとの枕詞をやがて薩摩としてよめり、和名抄薩摩出水郡勢度ハ
是なり、薩摩ハ太宰の府の国なれバ行く見られし、志のびてくらべ志か
ざりけりと

帥大伴卿宿次田温泉聞鶴喧作歌一首　和名抄筑前御笠
郡次田
湯原爾鳴蘆多頭者如吾妹爾戀哉時不定鳴
ゆのはらになくあしたづはわがごとくいもにこふれやときわかずなく
湯原ハ温泉の原なり、こふれやのやハ思ふなり

天平二年庚午勅遣擢駿馬使大伴道足宿禰時歌一首

こゝな勅のさまよりおほよそしるこゝとハ、大唐にハ行づをくなう、大時団はかはゝハ
まつくゝ結ゝく見えん、續紀和銅元年三月從五位下大伴宿祢道足爲
讃岐守とあるに、それなりしる人也

奥山之磐爾蘿生恐毛問賜鴨念不堪國

おくやまのいはにこけむしかしこくもとひたまふかもおもひあへなくに

山深き峯の苔むせるハ相もなくおそろげに見ゆるを岸もとく
おしよめしあるをかしこめるを、奥七よ奥山の岩まてけむりかしこしと見ゆ
なといふうもせん、是ハ相見命かなるを、今ハ宴まで思ひまそかしりまれ
て吟ぎしなるべし

右勅使大伴道足宿禰饗于帥家此日會集衆諸相誘驛
使葛井連廣成言須作歌詞登時廣成應聲即吟此歌

續紀天平三年正月授葛井連廣成外從五位下とある也

冬十一月大伴坂上郎女發帥家上道超筑前國宗形郡
名兒山之時作歌一首　郎女ハよきハつるゝく作保大納言安麻呂
ての女よく旅人ての妹え、これ太宰へおもむくを旅人ての家へよる時太宰
よりかへるを

大汝　少彦名能　神　社者名著始雞目名耳乎

おほなむちすくなひこなのかみこそはなづけそめけめなのみを

名兒山跡負而吾戀之千重之一重裳奈具佐末七國

なごやまとおひてわがこひのちへのひとへもなぐさまなくに

神代紀大巳貴命少彦名命とふたりと一つあしく、天の下を經營したまふ
よしあれバのくいつりなるさむのまのりてハ和るれバ名之にかへてなごあ
まと七名草山ともいふまなゐの年まの一年も名草目名国、按るに
此訓あいさあなくみてゝゝいてもゝ末ハ米の誤なるべし、此ぶ大汝の

貝ヲ具ニ誤
拾ヲ捨ニ誤

句のよみは旋句のよみしが落しまゝ又反歌もよみしが傳らぬなるべし

同坂上郎女海路見濱貝作歌一首 元暦本郎女の下向京二字あり

吾背子爾戀者苦暇有者拾而将去戀忘貝

わがせこにこふればくるしいとまあらばひろひてゆかんこひわすれがひ

冬十二月太宰師大伴卿上京時娘子作歌二首 目録によ

るに時の上之の字あるべし

凡有者左毛右毛将為乎恐跡振痛袖乎忍而有香聞

おほならばかもかもせんをかしこみとふりたきそでをしのびたるかも

おほならばその人なりしは袖をもふらんを貴人なればかしこみて袖ふらずとなり

かくるともかくてもかくもかくせん

倭道者雲隠有雖然余振袖乎無禮登母布奈

やまとぢはくもがくれたりしかれどもわがふるそでをなめしともふな

曰ヲ日ニ誤

奈は先帰路の遠さまをといひてさのれどもかく見えなくなるまでも袖をふらんをなめしとおもふなと

右太宰帥大伴卿兼任大納言向京上道此日馬駐水城顧望府家于時送卿府吏之中有遊行女婦其字曰兒島也於是娘子傷此易別嘆彼難會拭涕自吟振袖之歌

大納言大伴卿和歌二首

日本道乃吉備乃兒島乎過而行者筑紫乃子島所念香裳

やまとぢのきびのこじまをすぎてゆかばつくしのこじまおもほえんかも

神代紀吉備子洲を生とあり。こじまは備前なれども都への道なれば

やまと路といひて娘子が名兒島なれば吉備の兒島をすぐる時思はんとなり

丈夫跡念在吾哉水茎之水城之上爾泣将拭

ますらをとおもへるわれやみづくきのみづきのうへになみだのごはん

天智紀三年十二月に、是歳對馬島壹岐島筑紫國等に防と烽
と置。又筑紫に大堤を築て水を貯、名づけて水城といふよしみえ、水城の
ことをいひてほうらくといふ。このぬし、をつくるは室ちかみづくしき堂といへる
枕詞にて、みつきとさまねくらんといふ〻筑紫は七〻つくきのをこのみちとの〻
よりなべし、さに丈夫とおもへる納をかくさにつれあこつれなりんとせん

三年辛未大納言大伴卿在寧樂家思故郷歌二首

須臾去而見壯鹿神名火乃淵者淺而瀨二香成良牟
しばらくもゆきてみてしがかみなびのふちはあさびてせになりぬらん
神なびは神名備里に在しのなをも行てらんよ行て、其のあさくとあせ
といふ〻あさびの詞よりせなる

指進乃栗栖乃小野之芽花將落時爾之行而手向六
さしずみのくるすのをのゝはぎのはなちらんときにしゆきてたむけん

さしずみの說は和名抄大和忍海郡栗栖、くるすぎの里にはしらで行てよ
あるはされはりてよめんこゝろは、そへおぬべしといふ〻、なをの神へよるにはそれ社
の基るよへよめせんとなるべし

四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使之時高橋連蟲麻呂作歌一首并短歌
續紀天平四年八月丁亥從三位藤原朝臣宇合爲西海道節度使、同紀天平九年八月丙午參議式部卿兼大宰帥正三位藤原朝臣宇合薨、贈太政大臣不比等之第三子也とあるを

白雲乃　龍田山乃　露霜爾色附　時丹　打超而
しらくものたつたのやまのつゆじもにいろづくときにうちこえて
客行公者　五百隔山伊去割見　賊守　筑紫爾至
たびゆくきみはいほへやまいゆきさくみあたまもるつくしにいたり
山乃曾伎　野之衣寸見世常　伴部乎班遣之　山彥乃

やまのそきぬのそきみよとこのべとわのちつのそしやまびこの
將應極。谷潜乃。狹渡極。國方乎見之賜而。
とよまんきはみたにぐくのさわたるきはみくにがたをめしたまひて
冬木成。春去行者。飛鳥乃。早御来。龍田道之。
ふゆごもりはるさりゆかばとぶとりのはやくきまさねたつたぢの
岳邊乃路爾。丹管土乃。將薫時能。櫻花。將開時
をかべのみちにつゝじのにほはんときのさくらばなさきなんとき
爾。山多頭能。迎。参出六。公之来益者
にやまたづのむかへまゐでんきみのきまさば

そきへものハ、そきといふの轉語、處ゝ處ハ處ゝ處をいへるなりてよ
處ゝを忘ると思ふべし。いゆきさくゝゝハ岩二石根左久見でなづしこてと
をいハ彼語へ、おつつまいるハ西蕃の賊を守る為に、筑紫のさきへてよ

防人を遣しむるにつけて、山のそき野のそきにハ、よそもいつるめぐく、
遠く放ちをいふ、古事記に曾伎袁理登母和禮和須禮米夜と
あるも此そきへ、谷ぐく既出、國かたハ國の形なり、これ本のまゝさかし
いふなるし、冬木成の成ハ盛の誤なるべしよまいはう、死るのめぐる
く縁ありきはせまく、つゝじハ紅躑躅へ、にほハ既出、迎へんといへる
なるし、まゐでんハ君のめぐよるなりといそん

反歌一首

千萬乃軍奈利友言擧不爲取而可来男常曾念
ちよろづのいくさなりともことあげせずとりてきぬべきをのことぞおもふ

千元ハ千と云ふよれ、ことあげハ神代紀興言みハ高言と云ふ
もろこハ出の間によのいちはやきをいふてよし

右檢補任文、八月十七日任東山山陰西海節度使　そもち

反人の泣之

天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌　天皇ハ聖武天皇之

続紀天平四年正三位藤原朝臣房前為東海東山二道節度使從三

位多治比真人縣守為山陰道節度使從三位藤原朝臣宇合為西海

道節度使よし〻ゆ、仰まうるゝ御の下製の字あるべし

食國。　遠乃御朝庭爾。汝等之。　如是退去者。　平久。

をさめくにの、とほのみかどふなむちらのかくまかりなばたひらく。

吾者將遊。　手抱而。　我者將御在。天皇朕。宇頭乃御手

われハあそびんたむぶきそゐれハいまさんとすめらわのうづのみて

以。掻撫曽。禰宜賜。　打撫曽。　禰宜賜。　將還來日。

もてかきなでぞねぎたまふうちなでぞねぎたまふかへらんひ。

相飲。酒曽。　此豐御酒者

あひのまんぞこのとよみきハ

たむぶくハ紀ニ拱をむぶくと訓たり、手むぶくハ身抱ふくこまぬくと云、

書武成ニ垂拱而天下治とある注ニ垂衣拱手而天下自治とあるうづ

のみてハ宇頭ハ祈年祭祝詞ニ皇御孫命能宇豆能幣帛とあ

ふ同じく俗ニうづるきといふ條くことハ大御手といふニひとし、かき

なでぞゑる、ハかきハ詞のあくく、掻撫ふよくねぎハねぎらひつくく、労ハ

るこゝろ、打撫もかき撫ニ同じ、此待酒ハ大御酒く、此時酒を賜ふる

終ハ文意幸くて還来ん時、此大御酒ときこしをし賜ハもせんとの

たまへる

反歌一首

丈夫之去跡云道曽。凡可爾。念而行勿。丈夫之伴

ますらをのゆくとふみちぞおふろかのふおもひてゆくなますらをのとも

管ハ當ニ誤

おほろつハおほよそにて、まもし〳〵とのはふびやう〳〵月のへるをなかるぞ、いかに
よろづのみことをおさめやまうく

右御歌者或云太上天皇御製也　元正天皇之事之、元唐本ふくの古

入あれハえなつのそしたかるへし

中納言安倍廣庭卿歌一首　續紀天平四年二月中納言從三位兼催造長官知河内和泉等國事阿倍朝臣廣庭薨右大臣御主人之子也

如是為管在久乎好叙靈剋短命乎長欲為流

かくしつゝあらくをよみぞたまきはるみじかきいのちをながくほりする

おしうことよみてハ、あることよくしてぞとはむ何事の歎きの時よめるならん

五年癸酉超草香山時神社忌寸老麻呂作歌二首　草香ハ河内國河内郡

難波方潮干乃名凝委曲見在家妹之待將問多米

なのふはのつゝきやびのなのるをよくよみてなにはへかゝるいものまもりとなんさめ

志のひのなごりハ頭出つ本見の下君の名の名乗云〳〵

とめべしいそぎハみえてなん者八おりてる難波ともみてけるならし　草香

のしをとうぶれまわが越くれバ

直超乃此徑爾師弖押照哉難波乃海跡名附家良思裳

たゞこえのこのみちにしておしてるやなにはのうみとなつけゝらしも

古事記大長谷若建命自日下之直越道幸行河内云〳〵此歌のおもてるハ河内國より直路に押越て難波へ出れバかく八いへるへ枕詞のおし

てるなにはをいへるにハあらず或人のいへるハよしと瀬梓考

まいつり、宣長云二の句ハ結句へかゝれり、おしてるやハ難波海へかゝれるにて此歌

ハ三四一二五と句をついでゝみへし、くハおしてるのす久老考あり、海とのゝ

ぎてしまつのなかるすしとにてもさそやといへり、猶考ふべし

山上臣憶良沈痾之時歌一首

士也母空應有萬代爾語續可名者不立之而

をのこやもむなしかるべきよろづよにかたりつぐべきなはたてずして

男ハをとこをいふなり

右一首山上憶良臣沈痾之時藤原朝臣八束使河邊朝臣東人令問所疾之状於是憶良臣報語已畢有須拭涕悲嘆口吟此歌 續紀神護景雲元年正月従六位上川邊朝臣東人授従五位下とみゆ須の下臾を脱せるにや契沖いへり

大伴坂上郎女與姪家持従佐保還歸西宅歌一首

吾背子我著衣薄佐保風者疾莫吹及家左右

わがせこがけるきぬうすしさほかぜはいたくなふきそいへにいたるまで

けるハきをるといふことのちゞまれる也 巻十五にけころもひもときさけず[illegible]許能

安我家流いへのころものあるにこそあれ さほ風ハ飛鳥の風などいふにひとしく こゝ下ハ同風とよむ

安倍朝臣蟲麻呂月歌一首 續紀天平勝宝四年三月中務大輔従四位下安倍朝臣虫麻呂卒とみゆ

雨隱三笠乃山乎高御香裳月乃不出来夜者更降管

あまごもりみかさのやまをたかみかもつきのいでこぬよはふけにつゝ

雨ごもり枕詞、又ハ笠をかぶるとつゞくる也

大伴坂上郎女月歌三首

獦高乃高圓山乎高彌鴨出来月乃遲将光

かりたかのたかまとやまをたかみかもいでくるつきのおそくてるらん

姓氏録右京諸蕃雁高宿祢の氏あれば地名也

烏玉乃夜霧立而不清照有月夜乃見者悲沙

ぬばたまのよぎりのうちそおもしろくてねるつくよのみれバかなしさ

月ハもと照ちるを露よりほくれてしまぬを見るがうらしく此かうしハ

一 然の原きく月夜の也つきて添てしづけさ

山葉左佐良榎壮子天原門度光見良久之好藻

やまのはのさゝらえをとこあまのはらとわたるひかりみらくしよしも

さゝらハやきことさゝら飛除るといふも文の作うあるとそへりえハ

まとか月とそのいへりえうくハえるを述こしハ

右一首歌或云月別名曰佐散良衣壮士也縁此辭作此歌

良人のこゝろ入之

豐前國娘子月歌一首 娘子字曰大宅姓氏未詳也

雲隱去方乎無跡吾戀月哉君之欲見為流

くもがくれゆくへをなみとわがこふるつきをやきみがみまくほりする

[illegible]

[illegible]

湯原王月歌二首

天爾座月讀壮子幣者将為今夜乃長者五百夜継許増

あめにますつきよみをとこまひハせんこよひのながさいほよつぎこそ

月よみをとこハ名月をいふまひハよまひ

愛也思不遠里乃君来跡大能備爾鴨月之照有

はしきやしまぢかきさとのきみこんとおほのびにかもつきのてりたる

大のび従従従ぢうしハ語なしんこのとそし大野方のことゝ考べし君がきみこ

をひこんるみしもてしせるといへかなしん宣ちハ君来跡之我待よ

このところの語れるといへり

藤原八東朝臣月歌一首

巖ヲ嚴ニ磐ヲ盤ニ誤

待難爾余爲月者妹之著三笠山爾隱而有来

まちがてにわがするつきはいもがきるみかさのやまにこもりてありけり

妹がきる枕詞。いまだ出ぬ月をよめるなり

市原王宴禱父安貴王歌一首

春草者後波落易巖成常磐爾座貴吾君

はるくさはのちはうつろふいはほなすときはにいませたふときわぎみ

草はまづ萌て枯るれバうつろふなるいはほによせていへるなり

祝詞に堅磐(カキハ)尓常磐(トキハ)尓齋比奉といへるがごとし、ときはとはいはの常也。

木の常葉(トコハ)といふハ、此下にかくして遊びのところにあまたありてちりハなし

て秋ハ落(カレユク)ゆくとあれバ落易かれやすしとよむべし

湯原王打酒歌一首　宜志ら打ハ祈の誤か。さらバさかほかひとよむ

べしといへり

焼刀之加度打放丈夫之禱豊御酒爾吾酔爾家里

やきだちのかどうちはなつますらをのほぐとよみきにわれゑひにけり

焼刀ハ只刀といふ。かどハ稜(シキ)といふべし。ときのきをけつるといふにあらず

つるぎハつむがりの俗(尖)なれバかくもいふべし。稜ハ質(サマ)にて来る也。要旨ハ

のむと訓て飲とすれど、されど市原王の父の湯原王をほぐことなるを

徒の字と用ひくれバここもほぐの事なるべし

紀朝臣鹿人(カヒト)跡見(トミ)茂崗(シゲヲカ)之松樹歌一首　続紀天平九年九月正六

位より外従五位下を授く。跡の字を私に落せり。一本によりて補

茂岡爾神佐備立而榮有千代松樹乃歳之不知久

しげをかにかむさびたちてさかえたるちよまつのきのとしのしらなく

まつは跡人の居の字にて跡見の里なるべし。跡見は跡人の居所にて二ちるべし、

千代待といひかけたり

鳥ヲ鳥云 奴ハ好ノ誤

同鹿人至泊瀬河邊作歌一首

石走多藝千流留泊瀬河絶事無亦毛来而将見

いはゞしるたぎちながるゝはつせがはたゆることなくまたもきてみむ

たぎちる 拾侍

大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首

古郷之飛鳥者雖有青丹吉平城之明日香乎見樂思奴裳

ふるさとのあすかはあれどあをによしならのあすかをみらくしよしも

元興寺ハ飛鳥にありしを、ならへうつしてそこをも飛鳥といへり、

ならにまよふ云 奴ハ好の誤れるなるべし

同坂上郎女初月歌一首

月立而直三日月之眉根掻氣長戀之君爾相有鴨

つきたちてたゞみかづきのまゆねかきけながくこひしきみにあへるかも

紀此ノ下 云ノ脱 今補

三日月ハ眉といへる序のことばを初月歌と端書せるハいふかしや、おほかた

のまゆ、あしハあらすりしのこと

大伴宿禰家持初月歌一首

振仰而若月見者一目見之人之眉引所念可聞

ふりさけてみかづきみればひとめみしひとのまよびきおもほゆるかも

仲哀紀如美女之睩有向津國 睩此云麻用弭枳 宋玉招魂に

蛾眉曼睩 なども有

大伴坂上郎女宴親族歌一首

如是為乍遊飲與草木尚春者生管秋者落去

かくしつゝあそびのみこそくさきすらはるはおひつゝあきはかれゆく

遊びのみこそ云々 遊びハ あそびのみこそ 與ハ乞の誤なるべし

六年甲戌海犬養宿禰岡麻呂應詔歌一首 歌の上作の字あるべし

御民吾生有験在天地之栄時尓相楽念者

みたみわれいけるしるしありあめつちのさかゆるときにあへらくおもへバ

あへらくハあへるを延たる也、和名抄古本ニ日本紀私記云人民比度久佐或説於保美多加良ともあれバ、おほみたからとも訓べけれど、集一古ろにさわぐ御民も家わすれ身もたなしらずとあれバみたみと訓て

春三月幸于難波宮之時歌六首　続紀天平六年三月辛未行幸あり

住吉乃粉濱之四時美開藻不見隠耳哉恋度南

すみのえのこはまのしゞみあけもみずこもりのみやもこひわたりなん

粉濱住吉ニ有地名なるべし、字鏡蜆小蛤也自弥とあり、しゞみハ明もといはん序の詞也、同じ度ニ、あらはれぬしゞみをとりてよめれバ、従駕の女房を恋るなるべし、ことハあらはさずしてしたにのみ恋る心のすぢに恋るを云

右一首作者未詳

如眉雲居尓所見阿波乃山懸而榜舟泊不知毛

まゆのごとくもゐにみゆるあはのやまかけてこぐふねとまりしらずも

眉のごとハあはぢを引るのみにし、かけてハ阿波の方へ懸て漕行也

右一首船王作　続紀天平十五年五月従四位下より従四位上を授

従千沼回雨曽零来四八津之白水郎網手綱乾有沾将堪香聞

ちぬまよりあめぞふりくるしはつのあまあみてなはほせりぬれあへんかも

ちぬハ古事記ニ五瀬命云々到血沼海洗其御手之血、故謂血沼海也云々、紀ニ河内国泉郡茅渟海ともいへり、続紀霊亀二年三月割河内国和泉日根両郡令供珍努宮云々ともあり、ちぬハ和泉也、志はつハ陸の地、住吉のあたり也、白水郎ハ本泉郎と有るハ誤也、綱ハ本縄に作る、前の

説一本の縄ハ誤なり、綱手綱とあるべきを訓んか、綱の丈づゝなるべしとぞきこえ、されどさる詞なしやおぼつかなし、又一本綱を細に作り、按に綱ハ
綱の誤なるべし、綱手縄とよみてのさらハつなでなはと訓べし、舟の大なるなれバ
たへんうもハ用ゐるなれども、はしといふべし

右一首遊覧住吉濱還宮之時道上守部王應詔作歌
○本王の字あれど、一の王ハ衍文なれバ除つ、續紀天平十二年正月無位より
従四位下を授く

兒等之有者二人將聞乎奥渚爾鳴成鶴乃暁之聲
こらがあらばふたりきかむをおきつすになくなるたづのあかときのこゑ
こらしくハなでの妹をとさせり

右一首守部王作

丈夫者御獵爾立之未通女等者赤裳須素引清濱備乎

倍ハ位ノ誤

ますらをハみかりにたゝしをとめらハあかものすそひくきよきはまびを
たゝしハたちをと延ぎ、たまびハ濱方へ

右一首山部宿禰赤人作

馬之歩押止駐余住吉之岸乃黄土爾保比而將去
うまのあゆみおさへとゞめよすみのえのきしのはにふににほひてゆかん
止一本上に作る、臣の従なるべし、芝去よまいてゆるハまう気わるるなり
てらくあんよハ従まなりつゝ

右一首安倍朝臣豊継作　續紀天平九年二月外従五位下より従五位下を授

筑後守外従五位下葛井連大成遥見海人釣船作歌一首

海孃嬬玉求良之奥浪恐海爾船出爲利所見

あまをとめたまもとむらし、おきつなみかしこきうみにふなでせりみゆ

むかしあそびに心ゆかせむとて、心ゆかしいつるハちへがたく

桉作村主益人歌一首

不所念来座君乎佐保川乃河蝦不令聞還都流香聞

おもほえずきませるきみをさほかはのかはづきかせずかへしつるかも

思ひもかけずきつるをもと偏てつくゞゝ、夜のあるませバ、ちそまじりけれバ

右内匠寮大属桉作村主益人聊設飲饌以饗長官佐為王未及日斜王既還帰於時益人怜惜不厭之帰仍作此歌 後紀天平九年八月中宮大夫兼右兵衛督正四位下橘宿祢佐為卒

とくんゆ、

八年丙子夏六月幸于芳野離宮之時山部宿祢赤人応詔作歌一首并短歌 続紀聖武六月乙亥此幸のよし

八隅知之我大王之見給芳野宮者山高雲

やすみしゝわがおほきみのみしたまふよしぬのみやハやまたかみくも

曽軽引河速弥湍之声曽清寸神佐備而見者貴久

ぞたなびくかはゝやみせのとぞきよきかんさびてみれバたふとく

宜名倍見者清之此山乃尽者耳社此河乃

よろしなへみれバさやけしこのやまのつきバのみこそこのかはの

絶者耳社百師紀能大宮所止時裳有目

たえバのみこそもゝしきのおほみやどころやむときもあらめ

見つさまふハ見たまふ也、神さびて山をいふ、よろしなへハ川をほめていへり、

此詞ハ此山河の絶えんまのみこそ此宮所も止時もあらめ、でハ

止時あらじといふ

反歌一首

自神代芳野宮尓蟻通高所知者山河乎吉三

かみよゝりよしのゝみやにありがよひたかくしらせるは、やまかはをよみ

山と川とよくは、うるはしとはいふべし

市原王悲獨子歌一首

不言問木尚妹與兄有云乎直獨子尓有之苦者

こととはぬきすらいもとせありといふをたゞひとりごにあるがくるしさ

ものいはぬ木すら妹とせとは人の子の中に兄弟あるに、あまりて蘖をいひて子孫

とりつぎてそのあればかくいへるなり、宮ちは一人のみなりしで、因行らにく

まうしまうるといへるなり。拾遺集にはのみやこなするてふばらかの

そのへよそそる枝もてあそびしよめる、契沖云歌主の作者の、いまかぎきる

きみたあるなるは二つてもとなほまたせるにて、此王のえむもあ五百井女王のす

みな此獨子とこそ此女王なるべしといへど、さのれども市原王能登内

釈まくも五百井女王五百枝王を生まし後紀にまくえたれば、人の子の

よきよみませしなるべし、歌主の名も五百井女王のよしとよくかなへりとい

ふべし

忌部首黒麻呂恨友賖来歌一首　後紀宝字三年十二月忌部

首黒麻呂等賜姓連とみえ

山之葉尓不知世経月乃将出香常我待君之夜者更降管

やまのはにいさよふつきのいでんかとわがまつきみがよはふけにつゝ

月を待つ友を待つ、友の来ぬるをいふ、いさよふは出三いさよふ居

のかへあそびしなど、ふりきたるなを留ふても月の出んとして

たゆたふ様をいつて、十六夜をのいざよひの月もさるはいと後へ、君がの

たふさもしてさ一語を思ふらむ、又七山の端よいさよふ月と出んとて待つ

居るに夜の降ちる、山の端にいさよふ月をいつても君待ちとらんには

深きつとは同じ物也

冬十一月左大辨葛城王等賜姓橘氏之時御製歌一首

今本左大臣とあれど一本臣を辨とあるによれり、續紀天平元年九月正四位下葛城王為左大辨、同十五年五月以右大臣從一位橘宿祢諸兄拜左大臣とあり、同紀賜橘姓とあり

橘花者實左倍花左倍其葉左倍枝爾霜雖降益常葉之樹

たちばなは実さへ花さへその葉さへえだに霜ふれどいやとこはのき

さての詞はその木をほめたまへるまての御心にて、ことさらに意をもたせたまへるところ、常葉といふことはきはまりたる之、續紀養老五年詔ニ其地者皆殖常葉之樹云々、橘は実も花もめでたく世をもかけていはひ常葉なるをとりてほぎ給へるところ也

右冬十一月九日從三位葛城王從四位上佐為王等辭

皇族之高名賜外家之橘姓已訖於時太上天皇皇后共在于皇后宮以為肆宴而即御製賀橘之歌并賜御酒宿祢等也或云此歌一首太上天皇御歌但天皇〻后歌各有一首者其歌遺落未得探求焉今檢案内八年十一月九日葛城王等願橘宿祢之姓上表以十七日依表乞賜橘宿祢　續紀天平八年十一月葛城王佐為王上表橘宿祢の姓を賜らん事を願ふによりて、詔して橘宿祢を賜ふよし見ゆ、同紀天平勝宝二年正月左大臣橘宿祢諸兄に朝臣姓を賜ふよし見ゆ、太上天皇ハ元正天皇也、於時太上天皇の下天皇二字をと落せるか、或皇后二字も天皇を誤れるか、下に共在于皇后宮とあれバ皇后といへるにてもよしとおもはるれど聞えけし

橘宿祢奈良麻呂應詔歌一首　奈良麻呂ハ諸兄公の男也、續紀天平十二年五月無位より從五位下を授、寶字元年六月左大弁に至、例 ニ

真ヲ直ニ误

興ヲ與ニ
在ヲ有ニ误

よろしき語の下作の字なるべし

奥山之真木葉凌零雪乃零者雖益地爾落目八方

おくやまのまきのはしのぎふるゆきのふりはまさるともつちにおちめやも

かハふるといふ序のミ、姓を賜る語ニ辞皇族之高名、請外家之橘姓、辱思

所執、成得時宜、一依表、令賜橘宿祢、千秋万歳相継無窮とあるとこゝ

て、え皇族なれバ、末ハ後々もおとろへハくつしといへる心なるべし

冬十二月十二日歌儛所之諸王臣子等集葛井連廣成

家宴歌二首

比来古儛盛興、古歳漸晩、理宜共盡古情、同唱此歌、故擬

此趣、輙獻古曲二節、風流意氣之士、儻在此集之中、爭發

念心々、和古體

我屋戸之梅咲有跡告遣者来云似有散去十方吉

わがやどのうめさきたりとつげやらバこといふにゝたりちりぬともよし

こゝまつりハまれなりといふハ、何ぞとえかく告やりたらバ、来れかしと

いふこゝろとかるべくおもひたゞるく必語ひまねべし、さて後ハ花ハちりぬ

ともよしといへるなり

春去者乎呼理爾乎呼里鶯之鳴吾島曽不息通為

はるさればをゝりにをゝりうぐひすのなくわがしまぞやまずかよはせ

をゝりハ集中にとをしいふう、又られたらぞといふにしひしく、枝さきお

ゝく花の咲るをいひ、されバこゝにて花のしだりを咲とるらし此雲の

咲をといひて、巻三に言る柳の枝おほれるも、巻十に三笠の山ハ咲にけるかも

るべ、花お咲ていふぞ、たゞ咲あるのをいへるなく、かくしをらまるをらまくえる

花しえりせうるへ、わが鳴ハ家の庭に流れる池の中嶋なるをいふべし、鶯もまた

鳴ハで、鹿とともにいせ物語に嶋るのみ、まつたしまこといへり

九年丁丑春正月橘少卿并諸大夫等集彈正尹門部王家
宴歌二首　少卿ハ橘宿祢佐為なるべし
豫公来座武跡知麻世婆門雨屋戸雨毛珠敷益乎
あらかじめきみきまさんとしらませバかどにやどにもたましかましを
いつもあるべし
右一首主人門部王　後賜姓大原真人氏也　一本此注なし
前日毛昨日毛今日毛雖見明日左倍見巻欲寸君香聞
さきつひもきのふもけふもみつれどもあすさへみまくほしききみかも
前日をさきつひとよめるハ、こゝにみえて乎覧都日毛きのふとて一本のふれしなど
あれバをとつひと訓べし
右一首橘宿祢文成　即少卿之子也　一本此注なし　続紀天平勝宝三年九月
賜文成王甘南備姓とあり、橘氏を辞て甘南備の姓を賜りけるにや

榎井王後追和歌一首　続紀宝字六年正月无位より従四位下を授、
志貴親王の子也
玉敷而待益欲利者多鶏蘇香仁来有今夜四楽所念
たましきてまたましよりハたけそかにきたるこよひしたのしくおもほゆ
たけハ集中たかくといへる詞にて、そのハおろそかのそこなると合せよ
ねぐらおも設てまたれんよりも、おもひかけずきたれるがうれしきとそ
春二月諸大夫等集左少弁巨勢宿奈麻呂朝臣家宴歌
一首　続紀神亀五年五月正六位下より外従五位下を授
海原之遠渡乎遊士之遊乎将見登莫津左比曽来之
うなばらのとほきわたりをみやびをのあそぶをみんとなづさひぞこし
遊士をみやびをと訓よりて、なづさひ好字也、拙きありとしらんとて、仙
女の蓬莱より遠き海路を渡来るとし、あるじのこの女房らずの戯

萊ハ莱ニ誤

便ハ使ニ誤

みなみなく知らず此の莫ハなまきよと也ぐされど奥の誤なるべし
右一首書白紙懸著屋壁也題云蓬莱仙媛所嚢鴗為風流秀才之士矣斯凡客不所望見哉 衣袢ニ嚢ハ嚢の誤之と有り、字なま賛ハ賜之とあり、まぬ所の下一本作字あり、されバ嚢ハ嗚の誤、鴗ハ謁の誤なるく仙媛所作嗚謁為風流秀才之士矣なるべし

夏四月大伴坂上郎女奉拜賀茂神社之時便超相坂山望見近江海而晩頭還来作歌一首 神名帳山城國愛宕郡賀茂別雷神社、賀茂御祖神社二座とあり、相坂ハ神功紀忍熊王兵を曳て退、武内宿祢兵を出して追て逢坂に遇り、故号て逢坂といふよしま

木綿畳手向乃山乎今日越而何野邊爾廬将為子等
ゆふだゝみたむけのやまをけふこえていづれのゝべにいほりせんこら
子等一本吾等とあり、われと訓べし、ゆふだゝみ穂句にゝ白の山ハ別お坂山

の坂よりまさるべし、まゝ三作誤なるて奈良の手向のおくぬさもとよみなまする
ハ奈良坂のことをいへり、旅立人の先に手向する所なるゆゑにいへ、子ホハ従へる女房などをさすべし、子等ともよし

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首 嘆一本賛とせり、続紀霊亀元年五月始建元興寺于左京六條四坊とあり、同紀養老二年八月遷法興寺於新京とあり、元亨釋書に元興寺者上宮太子討守屋時蘇馬子又誓営寺、故於飛鳥地創之、推古四年成、始曰法興寺とあり

白珠者人爾不所知不知友縦雖不知吾之知有者不知友任意
しらたまハひとにしらえずしらずともよし、しらずともわれしれらバしらずともよし
旋以玉の句自ら白玉をたとへいふハ明らけし

右一首或云。元興寺之僧獨覺多智。未有顯聞。衆諸狎侮。
因此僧作此歌。自嘆身才也　嘆一本賛ニ作ル
石上乙麻呂卿配土左國之時歌三首幷短歌　續紀天平十
一年三月石上朝臣乙麻呂坐姧久米連若賣配土左国。若賣配下総国とあり。
此をとかく十年の中に載しハいかなるゆゑにか此歌の中に石上振の尊ハといふ
ことを決するハ乙麻呂妻作哥とみるべきを、端詞の文字落しなるべし。ふたつ
ここハ河ニ乱ちまよりなるべし

石上。振乃尊者。弱女乃。惑爾縁而。馬自物。
いそのかみふるのみことハたをやめのまどひによりてうまじもの
縄取附。肉自物。弓笑圍而。王。命恐。
なはとりつけししじものゆみやかくみておほきみのみことかしこく
天離。夷部爾退。古衣。又打山從。還来奴香聞

あまざかるひなべにまかるふるころもまつちのやまゆかへりこぬかも
石上布留とハ山邊郡石上氏ハかく物部氏なる故に、布留とよむ
氏なるべし。されバ石上布留とつけて、みことハたふとくあがめへり
なりてハおほいてかり乙麻呂を尊ひて、たをやめのまどひによりてハ犯せる
罪さるるあくハ久米連若賣を犯せしことをいふ。うまじものハ馬ハ縄をつけて
いふ、からめらるるを、縄つけるさまをいひ、弓矢かくみてハ
弁かくみ給を、將人の牧場とかくさるまへにかくしてハ古衣のまつち
山ハ紀伊の國にて、紀伊より紀の國へ渡るなるまつち山を越て帰るを
よしよろしくて

王。命恐。見刺並之。國爾出座耶。吾背乃公矣
おほきみのみことかしこみさしならぶくにゝいでますやわがせのきみを
宮を云ふ或人の説ニ此王命恐ミくハ次なる長歌の初にあるべく出座の

繁ハ繋ノ誤

菅ヲ管ニ誤

下文字脱たるか、國尓出座はゞ吾背乃君矣繋巻裳、ゆゝしとつゞく

くゝ、まへ十九ある虚見はちて和我勢能君乎緦麻久乃由ゝ志伎とあるを合せて考ふべきなり、いづれ誤れるにや、さてここハ此まのあらけのかぎり指して陣のまに

いとまうくるハ紀伊にちなしとあるくぞ、さし白べハ合つる也

繋巻裳湯湯石恐石。住吉乃荒人神。船舳尓牛吐

かけまくもゆゝしかしこし、すみのえのあらひとがみ、ふなのへにうしはき

賜。付賜将。島之埼前。依賜将。礒乃埼前。

たまひつきたまはん、しまのさき〴〵よりたまはん、いそのさき〴〵

荒浪。風尓不令遇。草管見。身疾不有。急

あらきなみかぜにあはせず、つゝみやまひあらせず、すむやかに

令變賜根。本國部尓

かへしたまはね、もとつくにべに

たまはんてふ事也、王の命をうけて此方の神をまつるべしとて本繋ハ繫の字の

誤れる也、荒人神景行紀日本武尊云、吾是現人神之子也、和名抄現

人神安良比止加美とあり、是ハ荒人神とまをしたる也、こゝハ荒人神といへるハ住吉の

神なり、翁ハ人ハ大の誤にて、あらおほみかみまつ、神功紀ニ神有誨曰和魂ハ王身

につきて命をまもり、荒魂ハ先鋒と為りて舟を導くとあるをもていへる

也、かくて船のへにうしはきたまひとハ、まづ船の舳に鎮まりまして、將ハ下よりあるさ

まなれど、かゝる所あれバ将をもて、むかふるのかくまもりて、又此急ハ其

十五須年也氣久とあるをもて、すみやかにとよむ、たまひ入るハたのむべきなり

國部ハ國方也、大のあるをもて其の反辞ハ落ちせしなるべし、又下の文

に此の神の守らせたまふにより、かへしたまはんてふよし、此の事にて

反辞落せしと見えれど、下の事にて麻呂のあたへたれバつて誤

詞なるべし、是も落したるなるん

父公爾。吾者真名子叙。妣刀自爾。吾者愛兒叙。参昇。

ちゝぎみにわれはまなごぞはゝとじにわれはめづこぞまゐのぼる

八十氏人乃。手向為等。恐乃坂爾。幣奉。吾者叙

やそうぢびとのたむけするかしこのさかにぬさまつりわれはぞ

追。遠将土左道矣。

おへるとほきとさぢを

是乙麻呂での言也、まなごハ真の子にて、めづこハ愛子也。めづこぞの句の下略有べきを略したるべし、宣長云まゐのぼるハ乙麻呂での乃ぼる事ハ、かしこの坂へつゞく詞也、さて八十氏人云々の二句ハ、たゞ恐といはん序也、るを、かしこく恐(カシコ)坂といひつゞけたるなり、手向為の下等の字一本になし、かしこの坂ハ、倭より河内へ越る所の坂也、天武紀に將軍吹負(フケヒ)紀臣大音を遣懼(カシコ)坂と合せ守らしむ、財等懼坂を退て大音の營に居云々

さて、ぬさまつりハ乙麻呂での事にて、われハぞおへる、ちかきほかの湊をもおもひ、又大みやことをはなれて、われハさるさまやとおもはれし、宣長ハ追ハ退(ノキ)の誤也といへり、さもあるべし

反歌一首

大埼乃神之小濱者。雖小百船純毛過迹云莫國

おほさきのかみのをばまはせまけれど(ちひさけど)ももふなびともすぐといはなくに

大埼ハ紀伊の國なるべし、神の御前ハ此七神前(コウヅサキ)あるでもみえず、紀伊ろうちわたしよきさまのこれハ紀伊まで行つきてかしこまりてとどまる所なるべし、小濱も同所なりしに、宣長云大埼みさきもある紀伊にあれど、たゞ一つの名にいふかいふべし、百船純も皆かくにて、純一の意にて、ひとの心に作さるゝを、神代紀純男をひとりのかぎりと訓、今ハ多く人ごとなどいふ意、あるを、ものたましひといひて、又此ならずさるゝのちかの人ならしてさくるといふ

とるべし

秋八月二十日宴右大臣橘家歌四首

長門有奥津借島奥真經而吾念君者千歳爾母我毛

なかとなるおきつかりしまおくまへてわがおもふきみハちとせにもがも

かりしまも長門の地名、おくまへてハおもふことハふかく、おくめてといふハ

まへの注に、集中おくまそをおくまそすといへり、おくまそといへん料に

いへる長門の地名をいひ出たり

右一首長門守巨曾倍對馬朝臣 続紀天平四年八月山陰道節度使判官巨曽倍津島を外従五位下を授くとあり

奥真經而吾念流吾背子者千年五百歳有巨勢奴香聞

おくまへてわれをおもへるわがせこハちとせいほとせありこせぬかも

せこハ對する人をさして、ありこせぬハあれかしと願ふ也

右一首右大臣和歌

百磯城乃大宮人者今日毛鴨暇無跡里爾不去将有

もゝしきのおほみやびとハけふもかもいとまなみとてさとにゆかざらん

里ハ家をいふ、これハ宴にあづかれる人々をさしていへり、何ごとも詞しかるべし

右一首右大臣傳云故豊島采女歌

橘本爾道履八衢爾物乎曽念人爾不所知

たちばなのもとにみちふむやちまたにものをぞおもふひとにしらえで

巻二三方沙弥娶園臣生羽之女ことに、橘の蔭ふむみちのやちまたの歌あり

それにあハせていへるとおもはるゝなるべし

右一首右大弁高橋安麻呂卿語云故豊島采女之作也

但或本云三方沙弥戀妻苑臣作歌也然則豊島采女當

時當所口吟此歌歟 たゞしこ二首とも志ぐいてのせうにハ一二

泄一本逍ニ作 堵一本都ニ作 目録里之ノ二字无

こゝのみにいてまぎしのみいちかくの集ろうするのきてし、豊島ハ和名抄摂津豊島天之万、武蔵豊島止志末とらんゆいづれよろしかりしの

十一年己卯天皇遊獦髙圓野之時小獸泄走堵里之中於是適値勇士生而見獲即以此獸獻上御在所副歌一首

獸名俗曰牟射佐妣 大和添上郡髙圓、和名抄鼯鼠一名鼯鼠毛美俗云無佐々比、今云下野二荒山の邊ゟハ樹よとゝきくかくるうぞ俗のぶをまといふめん

文夫之髙圓山爾迫有者里爾下来流牟射佐妣曽此

まちらをのたのまもやまふせあられバさとるおちくるむさゝびぞこれ

右一首大伴坂上郎女作之也但未逕奏而小獸死斃因此獻歌停之

十二年庚辰冬十月依太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發軍幸于伊勢國之時河口行宮内舎人大伴宿禰家持作歌一首

続紀天平十二年九月丁亥廣嗣遂起兵反同年冬十月壬午行伊勢国一云云、是日到山邊郡竹谿村堀越頓宮癸未車駕到伊賀国名張郡十一月甲申朔到伊賀郡安保頓宮宿大雨途泥人馬疲煩乙酉到伊勢国壹志郡河口頓宮謂之関宮也丙戌遣少納言従五位下大井王并中臣忌部等奉幣帛於大神宮、車駕停御関宮十箇日とあり、廣嗣ハ式部卿馬養之第一子なり、天平十年十二月太宰少弐となる

河口之野邊爾廬而夜乃歴者妹之手本師所念鴨

かはぐちののへにいほりてよのふれバいものたもとしおもほゆるかも

大よ続紀とりるかくハ十月言河口頓宮にやどりてよめるなり、家のあれず

あとをまねてよいとまよ同じ

天皇御製歌一首

妹爾戀吾乃松原見渡者潮干乃潟爾多頭鳴渡

いもにこひあがのまつばらみわたせバしほひのかたにたづなきわたる

いもにこひ枕詞、吾ハあごとよみて、志摩英虞郡にあごといふところあるハ、みな吾
の集中 和期 吾朝などもよめるがおほし、其の説なく、冠辞考にも委しく
いはれたるを、吾のうらと定むべきものいつしく五ロをあてとりたるハ吾をとうく時に讀る
るへきハ有へつく放ておのづからごといふは吾をあごとよむハにしたし
吾自松原(ワガマツバラエ)ともしたが、自とかみ従わるなく神句ハまつ(待)へかかる枕詞へいつて
みあれ、たゞ松原よめといつて地名にあらぬごとくいつて、巻十七わが世ことを妾我
松原欲(ヨ)こそおもせバ、とうしよみあれバ此説によるべし

右一首今案吾松原在三重郡、相去河口行宮遠矣、若疑
御在朝明行宮之時所製御歌、傳者誤之歟 后人の注く
丹比屋主真人(タヂヒノヤヌシ)歌一首 続紀宝字四年三月散位従四位下多治比真人
家主卒とみゆ

後爾之人辛思久四泥能埼木綿取之泥而将住跡其念
おくれたるひとをおもハく、しでのさきゆふとりしでてゆかんとぞおもふ
おもふハ此方とを後に、しでハ垂ことにて、今住とあるハ徙の誤也、其四泥ハ
山いふへつて在る作挽の時たよりあへしにおの萬よし久ゆかまくを狐也きよし
み英虞郡なるべきよしなの説也、されど神名帳伊勢国朝明郡志氏(シデ)神社
あるハ朝明ハ三重につゞきれハこその説といへるなるべし、其四の作挽の為の
作も待う信の説なく、まてなるべきを巻四にいつきも、心ハ按にし注に当せ
出る妹と共ひて神に行つ行く

右案此歌者不有此行宮之作乎、所以然言之、勅大夫従
河口行宮還京、勿令従駕焉、何有詠思泥埼作歌哉 後人の
行なるを

狭残行宮大伴宿禰家持作歌二首 巻七同し幸の度ふれハ河口

の訳よろしからず、みそかまつおろしましあるべし、さむとよまんか猶考べし
天皇之行幸之隨吾妹子之手枕不巻月曽歴去家留
すめろぎのいでましのまにまにわぎもこがたまくらまかずつきぞへにける
まかハまくなく
御食國志麻乃海部有之真熊野之小船尓乗而奥部榜所
見
みけつくにしまのあまならしまくまぬのをぶねにのりておきべこぐみゆ
おきべハ沖方之、志摩の浦然も浦海ハつきされど、偏見るとかくいへ
るハ都よりあんへの行ハ考べし
美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌一首　後紀云養老元
年九月丁未天皇行幸美濃国、戊申行至近江国観望淡海云々、甲寅至美
濃国云々、丙辰幸當耆郡多度山美泉云々、甲子車駕還宮、十一月癸丑天

皇臨軒詔曰朕以今年九月到美濃国不破行宮留連数日、因覧當耆郡
多度山美泉、自盥手面皮膚如滑、亦洗痛處無不除愈、在朕之躬甚験、
又就而飲浴者、或白髪反黒、或頽髪更生、或闇目如明、自餘痼疾咸皆
平愈云々、改霊亀三年為養老元年云々とあり
從古人之言来流老人之變若云水曽名尓負瀧之瀬
いにしへゆひとのいひくるおいびとのわかゆちふみづぞなにおふたぎのせ
人のいひくるハ言傳ふる也、わかゆハわかやぐとなり
大伴宿禰家持作歌一首
田跡河之瀧乎清美香従古宮仕兼多藝乃野之上尓
たどかはのたきをきよみかいにしへゆみやつかへけんたぎのぬのへに
たどかハ多度山を流るゝ河にや、みやつかへハ宮のことをつかへまつるを
仕まつることいふ、即宮居するなりとしるべし

不破行宮大伴宿禰家持作歌一首

關無者還爾谷藻打行而妹之手枕巻手宿益乎

せきなくはかへりにだにもうちゆきていもがたまくらまきてねましを

是十七字持てもとの近江の京ハ恭仁にもうちゆきて妹がたまくらさし

のべてねてこましと云ことなり。この人ハ從ふ京に行てまんとなり

さるハうちハ詞のし

十五年癸未秋八月十六日内舎人大伴宿禰家持讃久邇

京作歌一首　続紀天平十三年十一月戊辰ことし号為大養徳恭仁大宮としゆ

今造久邇乃王都者山河乃清見者宇倍所知良之

いまつくるくにのみやこはやまかはのきよきみればうべしらすらし

山と川と之、きよらを、きよらしめるとなり

高丘河内連歌二首

続紀神亀元年五月正六位下楽浪河内賜姓

髙丘連とさんゆ

故郷者遠毛不有一重山越我可良爾念曽吾世思

ふるさとはとほくもあらずひとへやまこゆるがからにおもひぞわがせし

一重山ハたゞ一重の山と云まくに近くまちかしとぞ、是ハ一陽山をこゆるなめりとし

もとより、越るがからハ故にと同じ

吾背子與二人之居者山高里爾者月波不曜十方余思

わがせことふたりしをればやまたかみさとにはつきはてらずともよし

ふたりゐてハ友をさそて、山ニ月を待てるなり

安積親王宴左少辨藤原八束朝臣家之日内舎人大伴

宿禰家持作歌一首　安積親王皇子也

久堅乃雨者零敷念子之屋戸爾今夜者明而将去

ひさかたのあめはふりしけおもふこのやどにこよひはあかしてゆかん

西ノ西二誤

おかうこハあるじハ東人にといつるゆゑおりあま　おやうのたこのゑうとこて恒

しらるなるらん

十六年甲申春正月五日諸卿大夫集安倍蟲麻呂朝臣家

宴歌一首 作者不審 一本此四字なし

吾屋戸乃君松樹爾零雪乃行者不去待西将待

わかやどのきみまつのきにふるゆきのゆきにはゆかじまちにしまたん

西一本西とあるよあれてねよ結ぶと意ふるもこよあハ行ゆかじに結てあらんとこ

古る此君の紀げすぐくなおぬきくのこのと深く巻二十のせうちハ一を末結る

ハまでにしといつてハ何にそやうふくをとこぞ

同月十一日登活道岡集一株松下飲歌二首 いくぢ 巻三十出

一松幾代可歴流吹風乃聲之清者年深香聞

ひとつまついくよかへぬるふくかぜのこゑのきよきハとしふかみかも

巻三ちき此ハ年深みくしようみく年久しきをいふ

右一首市原王作

霊剋壽者不知松之枝結情者長等曾念

たまきはるいのちハしらずまつがえをむすぶこころハながくとぞおもふ

巻二有馬皇子の磐代の濱松が枝を引結びとよみ給へるにならひて是ハ松ハ久しく年経

るものなれバよそひをとむすぶ心むきけるを極自

右一首大伴宿禰家持作

傷惜寧樂京荒墟作歌三首 作者不審

紅爾深染西情可母寧樂乃京師爾年之歴去倍吉

くれなゐにふかくそめにしこころかもならのみやこにとしのへぬべき

紅ハ深く染しとらん為のしゝやまさりひとすし　ならのみやこの深く心よ

まみくあれバすやハかくあれりてし様ころうるをよくへぬべくとおもふきこと

若ヲ著ニ誤

世間乎常無物跡今曽知平城京師之移徙見者
よのなかをつねなきものといまぞしるならのみやこのうつろふ見れば
紫おもふらし歌のあれけりとみえくよのなかなりとしるべし
石綱乃又變若反青丹吉奈良乃都乎又将見鴨
いはつなのまたわかがへりあをによしならのみやこをまたもみんかも
石づなの枕詞ふるきのそのぐろくあらバニつひ又たちかへれと歌とせる
するぞまうらんとえ、まて三字をまさね變でもわらしくよるしの歌とを
こんどその朱なんとりてつかるかし、本著とあるハ誤へ一本若とあるる
よれり
悲寧樂故京郷作歌一首并短歌 一本京の字ちらよるべし
八隅知之吾大王乃高敷為日本國者皇祖乃
やすみしわがおほきみのたかしきのやまとのくにはすめろぎの

牢ヲ窂ニ誤

鉤ハ駒ノ誤カ

神之御代自敷座流國爾之有者阿禮将座御子之嗣継
かみのみよゝりしきませるくにしあれはあれまさんみこのつぎ〳〵
天下所知座跡八百萬千年矣兼而定家牟
あめのしたしらしまさんとやほよろづちとせをかねてさだめけん
平城京師者炎乃春爾之成者春日山御笠之野邊爾
ならのみやこはかぎろひのはるにしなれはかすがやまみかさのゝべに
櫻花木晩窂貌鳥者間無數鳴露霜乃
さくらばなこのくれがくれかほどりはまなくしばなくつゆしもの
秋去来者射鉤山飛火賀塊丹芽乃枝乎石辛見散之
あきさりくれバいこまやまとぶひがをかにはぎのえをしがらみちらし
狭男壮鹿者妻呼令動山見者山裳見貌石里見者
さをしかはつまよびとよめやまみればやまもみがほしさとみれば

里裳住吉物屓之。八十伴緒乃。打經而。里並敷者。
さともすみよし。もののふのやそとものをのうちはへて。さとなみしけば
天地乃。依會限。　萬世丹。榮将往迹。思煎石。
あめつちのよりあひのきはみよろづよにさかへゆかんとおもひし
大宮尚矣。恃有之。名良乃京矣　新世乃。事爾之
おほみやすらをたのめりしならのみやこをあらたよの。ことにし
有者。皇之。　引乃真爾真荷。春花乃。　遷日易。
あればおほきみのひきのまにまにはるはなのうつろひかはり
村鳥乃。　旦立　往者。刺竹之。　大宮人能。　蹈
むらとりのあさたちゆけばさすたけのおほみやびとのふみ
平之。通之道者。　馬裳不行。　人裳往莫者。荒爾異類香聞
ならしかよひしみちはうまもゆかずひともゆかねばあれにけるかも

たつたまハことしをせまとなえ、やまとハ大和く宮殿の訓の事ハ巻三の追加にいへり、
あれまさんハ生繼給はんく、將座一本座將とあり、此まよろし、後あり、
いづれまさりてあるべし、かぎろひの梯ね、かぎろひハ朝まるとはじめのなりんと
ゐにそれき、射釣山一本射駒とあり、又その山のまへといふ手はなきの八釣
山ちかんそとゐの後く宮ちかくにこまやつるよし叶なり、羽飼の低なりしん、
峯十二春日なる羽買の山ゆゑといへるにつきていへるなるべし、飛火が堀一本
嵬とあり、いづれまさりてあるべし、倭紀和銅五年正月大和国春日烽と置く平城
に通よし見へたりとうなハおなじよせのなり今のまあとなく志らせたまへれハきこえて
ハうちハ詞、さんハ延之、思並一本里並とあるとよしとして、天地の依あひのき
はみハ天地のよりあひてかぎりなくといふ、天地のともかぎりなくいふがゆゑし、往の下
の迹一本徳とあるは誤なり、このうちに、新らしき代なりけりていふなりといふ、
りのまにまにハ天皇のひきゐるさせたまふにまかせていふ、春花のハうつろひか

ならといへるは都をせるより、村鳥の抜得、往莫は下よくきこえたれど、よろしから
ず、さて此歌よりは續紀聖武天平十三年正月朔天皇始御恭仁宮受朝、
宮垣未就、繞以帷帳云々、天平十五年十二月辛卯初壊平城大極殿并歩廊、遷
造於恭仁宮、四年於茲、其功纔畢云々、此ころは大かたのあくる年のすさまれば、まだ
人もいまだ住はざりしさまなるべし

反歌二首

立易古京跡成者道之志婆草長生爾異梨
たちかはりふるきみやことなりぬればみちのしばくさながくおひにけり
ちかき古花のうつろひのかはりしいふとくちはてゝよもぎ立かはりのうら
ハ詞也

名付西奈良乃京之荒行者出立毎爾嘆思益
なつきにしならのみやこのあれゆけばいでたつごとになげきしまさる

郷ヲ郷ニ誤

みつきまし、は都を人まはきこしみるさびみしなく

讃久邇新京歌二首并短歌　布當宮ハ香原新都といへるもみな
山城相楽郡之内十七里讃ニ香原新都ニ有也

明津神　吾皇之　天下　八島之中爾　國者霜
あきつかみわがおほきみのあめのしたやしまのうちにくにはしも
多雖有　里者霜　澤爾雖有　山並之　宜國跡
おほくあれどもさとはしもさはにあれどもやまなみのよろしきくにと
川次之　立合郷跡　山代乃　鹿脊山際爾　宮柱
かはなみのたちあふさとゝやましろのかせやまのまにみやばしら
太敷奉　高知為　布當乃宮者　河近見　湍音叙清
ふとしきたてゝたかしらすふたぎのみやはかはちかみせのとぞきよき
山近見　鳥賀鳴慟　秋去者　山裳動響爾　左男鹿者

岡ノ周ニ誤

やまちのみゞゑとのねとよむ。あきされば。やまもとゞろに。さをしかは。
妻呼令響。春去者。岡邊裳繁爾。巌者。花開乎呼理。
つまよびとよめ。はるされば。をかべもしげに。いはほには。はなさきをゝり。
痛何怜。布當乃原。甚貴。大宮處。諸己曾。
あなみやし(おもしれ)。ふたぎのはら。あなたふと。おほみやどころ。うべしこそ。
吾大王者。君之隨。所聞賜而。刺竹乃。大宮
わがおほきみは。きみのまに。きこしたまひて。さすたけの。おほみや
此跡。定異等霜
こゝとさだめけらしも

明神吾皇ハ別天皇とさしなる。山並ハ山しろハ山つゞけるなれバ
いづみ河ハ没し山並とつゞく同じく川とのつゞけるとらへされハ之会さとし
いづミハ河のこと。御へ本御ともある。ハ謬也。鹿背山ホ不弱也。讚紀伴山く

山ヨ弓ニ誤

あそこ。ふたぎのこゝや此地泉川の二方より落合て二つ山きのこゝなる
なべし。響ハ動の誤なるべし。宮所ハ花咲えたる處ハ花のさかりかく
ところなるをいふ。あなおもしろてあはれなりといふべし。同じく
ほめる詞也。君のまにまハ前なるごとくいふを同じ。かく山川の宮所國と
きこしめしよろしくも大宮所しなるべしといふ。判竹の枕詞

反歌二首

三日原。布當乃野邊。清見社。大宮處。定異等霜
みかのはら。ふたぎのぬべをきよみこそ。おほみやどころ。さだめけらしも
結句一本此跡標刺とあり。こハことあやまりとよしなし。其のゆゑきりつる
べし

山高來。川乃湍清石。百世左右。神之味將往。大宮所
やまたかく。かはのせきよし。もゝよまで。かみしみゆかむ。おほみやどころ

山今本弓ニ作る、先人云、山の字を弓ニ作れるといへり、此集ニしか令
のめく拙きたかねバ字のちがひ又偏あり、しかとかくなりて、之字ハ作後
とあり、神さびといふに同じ

吾皇、神乃命乃、高所知、布當乃宮者、百樹
わがおほきみかみのみことのたかしらす、ふたぎのみやハ、もゝき
成、山者木高之、落多藝都、湍音毛清之、鶯乃、来鳴
なりて、やまハこだかし、おちたぎつ、せのともきよし、うぐひすの、き
春部者、巖者、山下耀、錦成、花咲乎呼里
なくはるべハ、いはほハ、やましたひかり、にしきなす、はなさきをゝり
左牡鹿乃、妻呼秋者、天霧合、之具禮乎疾、狭丹頬歴
さをしかの、つまよぶあきハ、あまぎらふ、しぐれをいたみ、さにつらふ
黄葉散乍、八千年爾、安禮衝之乍、天下、所知食跡
もみぢちりつゝ、やちとせに、あれつかしつゝ、あめのしたしろしめさんと
百代爾母、不可易、大宮處
もゝよにも、かはるべからぬ、おほみやどころ

百樹成の成ハ借字なくといふめれど宜しからず成ハ盛の借字、
もるハ茂(しげ)るのこゝろ、森(もり)の用語なりといへり、借字ならハ此字、席の上の壯一本
牡ニ作るをよしとして、あまぎらふハ天の借字とあひてしぐれふるなり、さにつ
らふ枕詞、あれつくハ生れ給ふをいふなり、此一篇家原の大宮づくり安
礼衝武(とも)ともよめり

反歌五首

泉川、徃瀬乃水之、絶者許曽、大宮地、遷往目
いづみがは、ゆくせのみづの、たえばこそ、おほみやどころ、うつろひゆかめ
泉川ハ前に出たり

布當山山並見者百代爾毛不可易大宮處

ふたぎやまやまなみみれば もゝよにも かはるべからぬ おほみやどころ

嬢嬬等之續麻繫云鹿脊之山時之往者京師跡成宿

をとめらがうみをかくてふ かせのやま ときのゆければ みやことなりぬ

鹿背山もおほ宮ちかきなるべし。をとめらがうみをかくる綛といひかけて序とせり。綛は四時祭式に加世比、また古語拾遺に以綛之と見えて、うみをかくる具也。此歌の意は、時うつりて世かはれば、春日の田お(?)と京師となしつといふに同じ

鹿脊之山樹立矣繁三朝不去寸鳴響爲鶯之音

かせのやま こだちをしげみ あささらず きなきとよもす うぐひすのこゑ

朝さらずは毎朝のこと

狛山爾鳴霍公鳥泉河渡乎遠見此閒爾不通

こまやまに なくほとゝぎす いづみがは わたりをとほみ こゝにかよはず

一云 渡遠哉不通有武（ワタリトホクヤ カヨハザラム）

狛山は右の歌どもに、古京は春秋をのみいへるを、夏の事にほとゝぎすをよめるなり。つぎて此一首は、かのおなじくべし。夏の五月をもあはれ深くよみて、此歌をかへらるれぬなりけるにあり

春日悲傷三香原荒墟作歌一首并短歌 續紀天平十五年十二月更造紫香樂宮仍停恭仁宮造作焉とあるは、いまだ人もうつりはてざる程に捨られし也

三香原久邇乃京師者山高河之瀬清在吉迹人者雖云在吉跡吾者雖念故去之里爾四有者

みかのはら くにのみやこは やまたかく かはのせきよみ すみよしと ひとはいへども ありよしと われはおもへど ふりにし さとにしあれば

國見跡人毛不通．里見者．家裳荒有．波之異耶之．
くにみれど．ひともかよはず．さとみれば．いへもあれたり．はしけやし
如此在家留可．三諸著鹿脊山際爾開花之．色目列敷．
かくありけるか．みもろつく．かせやまのまに．さくはなの．いろめづらしく．
百鳥之．音名東敷．在杲石．住吉里乃．荒
もゝとりの．こゑなつかしく．ありがほし．すみよきさとの．あるゝ
樂苦惜喪．
らくをしも

宣長云或人の説に反の在吉の在ハ住の誤なるべし．夫にあらがり．住よき
里しあれどといへりは先出るべし．耶の下一本之の字なきによりよむ．されど
此もはしけやしの下二句中句の説ゝるゝ．三諸著一本天諸著とあり．
ともに誤れるなり．又或説に三諸ハ生緒の字の誤なるべし．さらバみもろと

つ作とつゞくる也．生緒ハ倭夢の借字也といへり．宣長ハ著ハ繋の誤
みもろつみをかくなりんといへり．在杲石．宣長ハ杲ハ古老切又下老切と
ありてかほのこゝろ也字ゝ借る也．三ニ見杲石(ミカホシ)とも有．集中かほるると
杲えるとあり．詞ハ其の歌しくまくほしといふ也．見まくほ
しとおもふ歌ともにあれ之．哭一本喪に作るによる．あるらくハあ
るゝと也

反歌二首

三香原久邇乃京者．荒去家里．大宮人乃．遷去禮者
みかのはらくにのみやこハあれにけりおほみやびとのうつろひぬれば
うつりいぬれバ．ハ宮者一本宮不移されば

咲花乃．色者不易．百石城乃．大宮人叙．立易去流
さくはなのいろはかはらずもゝしきのおほみやびとぞたちかはりぬる

そのさハかりつねにもたえまる人ハありつまかそれるを

難波宮作歌一首并短歌　続紀天平十六年二月甲寅運恭仁高
御座并大楯於難波宮、又遣使取水路運漕兵庫器仗、乙卯恭仁
京百姓情願遷難波宮者恣聴之とみゆ

安見知之吾大王乃。在通。名庭乃宮者。不知魚取。
やすみしゝわがおほきみのあもがよふなにはのみやハいさなとり
海片就而。玉拾。濱邊乎近見。朝羽振。浪之聲
うみかたつきてたまひろふはまべをちかみあさはふるなみのと
躁夕薙丹。櫂合之聲所聆。暁之。寐覺爾聞者。
さわぎゆふなぎにかぢのときこゆあかときのねざめにきけば
海石之塩干乃共。汭渚爾波。千鳥妻呼。葭部爾波。
あまいしのしほひのむたにうらすにはちどりつまよびあしべには

合ハ衍文

干ヲ手ニ誤　汭ヲ納ニ誤

鶴鳴動。視人乃。語丹為者。聞人之。視巻欲
たづなきとよみみるひとのかたりにすればきくひとのみまくほり
為。御食向。味原宮者。雖見不飽香聞
するみけむかふあぢふのみやはみれどあかぬかも

在通ハ、難波ニ度々幸ありしかれバいへり、海片つきてハ、海辺によれるをいふ、濱邊一本濱經に作る、はまぢともよむべし、朝羽ふる、是ニ朝鳥羽振風の吹よせるをいふ、又同じ、蹸一本躁に作、干禄字書ニ云蹸
躁上俗下正　櫂ハ和名抄棹、釋名云、在旁撥水曰櫂、亦作棹漢語抄云加伊　櫂ハ水中且進櫂也とあり、こゝハかぢと訓べし、合の字ハ衍文ならん、海石ハ石ハ原の誤れるにや、うなばらのとよむべし、又ハ若の誤ならん、わかづらならんか、むたハ共といふ古語、汭一本汭に作るとよしとて、集中多くみゆると訓るも、古き書のよみてともみえくて人の語り継バ、ちかと申人ハ

ほのほとするといふこと、みけむかふハ稚羽、味原ハ攝津東生郡なる別地なり
此の歌ハ、集中同地を味経とかけり

反歌二首

有通難波乃宮者海近見漁童女等之乗船所見
ありがよふなにはのみやはうみちかみあまをとめらがのれるふねみゆ

塩干者葦邊爾診自鶴乃妻呼音者宮毛動響二
しほひればあしべにさわぐあしたづのつまよぶこゑはみやもとどろに
診一本躁とあり同字なり さわぐとよみてあるべしさわぐと訓て

過敏馬浦時作歌一首并短歌

八千桙之神之御世自百船之泊停跡八島國
やちほこのかみのみよよりもゝふねのはつるとまりとやしまくに
百船純乃定而師三犬女乃浦者朝風爾浦浪
もゝふなびとのさだめてしみぬめのうらはあさかぜにうらなみ
左和寸夕浪爾玉藻者来依 白沙 清濱部者
さわぎゆふなみにたまもはきよるしらまなごきよきはまべは
去還 雖見 不飽 諸石社見人毎爾 語嗣
ゆきかへりみれどもあかずうべしこそみるひとごとにかたりつぎ
偲家良思吉百世歷而所偲将往 清 白濱
しぬびけらしきもゝよへてしぬばれゆかんきよきしらはま
八ちほこの神ハ大己貴命の一の御名にてよまいたるなり、少彦名命と
ともに天の下を經営しし神なればなり、船純よりてふなびとゝ
よめるは、けしきを一相拾良思吉といへるも同じ詞也、昔よりの湊
よくかなしきのみなとのゐをよめるなり

反歌二首

真十鏡見宿女乃浦者百船過而可往濱有七國

まそかゞみみぬめのうらハもゝふねのすぎてゆくべきはならなくに

まそかゞみ枕詞、みしきのうらへうつるぎこを以

濱清浦愛見神世自千船湊大和太乃濱

はまきよみうらうるハしみかみよよりちふねのはつるおほわだのはま

ちふねハ多くの船といへれバこも神世よりいへり、大わだハ摂津に

右二十一首田邊福麻呂之歌集中出也

萬葉集巻第六

巻六追加

瀧上の御舟の山はことし、清清ハ藤原濱臣云、晴清の誤なるべし、字彙

晴嶒深冥也、深良又谷と有、慧林一切経音義ニ晴嵤深冥高峻也

と有、さらバふかみさやけみとよむべくや、又高峻のさまにてたかみくし

よむべしといへり、峻清の誤なりんと信しつれど字もれよりもて晴の誤とせん

うさ出のるべし、さて今のみにて八字義ニハよくかなへれど此方ニこなたこ

と訓べし

国立公文書館
National Archives of Japan